
ドラゲーンズ・メール

三州門壬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンズ・メール

【Nコード】

N5472W

【作者名】

壬門州三

【あらすじ】

貴族の次男カインドは、学院への旅の途中、とんでもない美形の剣士とドラゴンの子供に出会う。なりゆきで同行することになった二人と一匹は、厄介事をバタバタしつつ切り抜けるうちに、何故だか国を揺るがす陰謀の真っ只中にいた。少々口と頭が回るヘタレと完璧超人に見せかけてばやんな魔剣士、空気を読むドラゴンの物語。

1・出会い

俺の生涯初の旅路は、盗賊団に捕まってアジトまで連れて行かれるという、最高に素敵なクライマックスを迎えていた。

森の奥深く、アジトはちょっとした酒場か宿屋ほどの大きさがあり、屈強な男たちが溢れ返っている。

まさに勝利の宴といった様子で、食べ散らかし呑み散らかし、まだ血がついたままの剣を振り回す。何人かケガ人も出ているほどののに、誰も場を収めようとする者がいない。

それでも、後ろ手に縛られて転がされている俺にはどうでもいいことである。

「おいおい、辛気臭エ顔してんなよ、兄ちゃん」

そばにいた髭面のおっさんが声をかけてきた。

良い仕事をした後の上手い酒で気持ち良く酔った盗賊にイジられるほど哀しいこともないだろう。

「——縄を解いていただけるか、食事をさせていただければ、笑顔で歌でも歌いますよ？」

「ガッハッハ！ 縄を解くわけにやいかねーが、パンぐらいはくれてやるぜ」

おっさんはそう言っただけの口には、パンを一斤そのまま突っ込んできた。口の中の水分が一気に持つていかれて、歌うどころではない。「兄ちゃんには、これから稼がせて貰うんだしな。ただ、逃げようとすれば、殺す」

おっさんは台詞の締めだけドスを効かせた。

雰囲気が悪くなりそうだったので、俺は無理やりパンを飲み込んで、口を開いた。

「——ええと。一つ質問なんですけど……」

「ふん、なかなか肝っ玉が据わってるじゃねえか。何だ」

「俺で稼ぐつてのは……？」

おっさんはゲハハハハと腹を抱えて笑った。

「お前、どこぞの貴族だろ。若造がそんな格好してりゃあガキでもわからあ。上手くやりゃ、親から金ふんだくれるって寸法さ」

やれやれ。こいつは困った。

俺の身なりは軽装の兵士といったところだ。ただ、装備はすべて新品で、しかもそこそこの金がかかっている。仕立てがいいだけでなく、装飾過多というか、見た目に派手だった。親が貴族というのも正解。

だが、しかしだ。

こいつらの悪だくみは絶対上手くなどいかない。

父上は俺がどうなろうと、鼻で笑って馬鹿めと罵り、ついでに唾を吐き捨てて、最後は高笑いするだろう。俺の為に金を払うことは絶対がない。母上に期待しようにも、父上の目を盗んで動かせる金額には限界がある。

つまり、目論見が外れて悔しい思いをした盗賊団の皆様は、俺で鬱憤晴らしをすることになるわけだ。最終的には作業的な奴隷か性的な奴隷かあつまり死亡か。どれも嫌だ。出来ればさっさと逃げ出したい。

しかしどれだけ無計画で粗雑とはいえ、盗賊たちは俺から武器を取り上げるのは忘れなかった。細身の剣も、魔銃も手元にはない。あったところで、数十匹の猫に追い詰められた鼠に角が生えた程度だ、という事実はこの際置いておこう。

「……ふーむ……」

大多数が眠るまで待つしかないか。

まだまだ続きそうな宴の中、そんなヘタレな結論に至った頃――。

耳が馬鹿になるほどの爆音が響き渡った。アジト全体が振動する。

「な、何だっ!？」

おっさんを筆頭に、馬鹿騒ぎをしていた盗賊たちの動きが止まり、場が静まり返った。

俺はといえば、嫌な予感がして、床を転がるように壁まで移動した。なるべく扉から離れる形で。

「……おい、誰か様子を見に——」

盗賊団の誰かがそう言い終わる前に、もう一度爆音。今度は、実際に扉やその周りの壁が吹き飛んだ。木片や小石と一緒に熱風が荒れ狂う。何人かは爆風をともに受けて転がったほどだ。

「……っ」

俺は言葉を失った。

今この時出来た大穴の向こうには、月と森の木々を背にして、青年が立っていた。

シルバーブロンドは耳を隠す程度、細身の体。俺と同じような軽装の鎧を着込んでいるが、正直言って古めかしく、実用第一で装飾などもない。右手には体に不釣り合いなほどの大剣が握られていた。そして、何より目が行くのは、まるで絵画から抜け出たかのような整いすぎた顔立ちだ。

切れ長なのに大きな目。瞳はやや赤みがかった。ずっと通っていないながら主張しすぎない鼻筋。どちらかといえば薄い部類だがやけに引き付ける唇。柔らかさすら感じさせる頬と、鋭角な顎。あらゆる矛盾を押し通す、正真正銘の美形である。

わけのわからない事態に見た目麗しい乱入者。この状況に、俺も盗賊団の皆々様も動けない。ただ呆然と青年を見つめていると、彼が口を開いた。

「二十人ほどか。十分で片をつけよう——」

高めの声まで人を引き付ける。抑揚のある話し方といい、主役を張る舞台役者のようだ。しかし、言っていることは、演じられる英雄よりも極端だった。

「——さあ、死ぬ気で来るがいい」

その一言で、盗賊たちの止まった時間が動き出した。

「フザけやがって！ かかれえ！」

誰かが叫び、俺を除く全員が構え、数人が向かっていった。それぞれ剣やこん棒、槍など、その辺に落ちていたり、たまたま手にしていた武器を持っている。頭目らしき人間がいないわりに、統率がとれていた。

それも大した足しにはならなかったわけだが。

青年は見た目にも重い大剣を軽々と振り上げ、一瞬の溜めを見せた後、振り下ろした。

と言っても、俺に見えたのは、彼が大剣を高く振り上げたところまでで、気がつくと大剣は床板にめり込んでいたし、盗賊たち数名は大ぶりの肉片と化していた。

またしても盗賊団の時間が止まる。青年はその隙を見逃してはくれなかった。

「行くぞっ！」

ほとんど突風だった。見えるのは一步踏み出すその瞬間だけ、次に見えるようになると何人かの盗賊がだいたい真っ二つに斬られていて、それらが床に落ちて音を立てる頃にはもう青年はどこにいるのかわからない。

「くそがあ！」

俺に話しかけて悦に入っていたおっさんが、俺の魔銃を抜いた。

ヤロウ、ちゃっかり自分の物にしてやがったな。おっさんは意外に機敏な動きで、青年が方向転換の為に立ち止まったその一瞬を逃さず、引き金をひく。

ハサー・テループ

魔弾は、黒魔法のく貫く枯れ葉くが込められたものだった。魔銃に込めるには一般的な物の一つで、スピードがあり、場に左右されず真っ直ぐ進む為に狙いが付けやすい。殺傷力もそこそこある。例えば青年がアホみたいに強くても、当たり所が悪ければ死ぬし、そう

でなくても当たれば無傷では済まされない筈だ。
打ち出された魔法は、きっちり青年のこめかみに向って飛んでいく。

「——ふん」

青年は鼻で笑った。

おっさんが起死回生で放ったく貫く枯れ葉ハサー・テループを何も持っていない左手の一振りで弾く。傍目には投げやりにも見える動作だった。弾かれたく貫く枯れ葉ハサー・テループは軌道を変え、天井に穴を開けた。

「んなつ！？」

おっさんが叫んだ。そうでなければ俺が叫んでいた。アホみたい
に強いところではない。完全に超一流、つまり、Aクラスの戦士だ。

「狙いは良かったが。く貫く枯れ葉ハサー・テループぐらいではな。さ、お前が最後だ」

彼の言葉で我に返り、慌ててアジトを見渡すと、生きているのは俺と青年とおっさんだけだった。おそらく全員、一太刀で息の根を止められている。打ち漏らしは一人もいない。ほんの数分前まで宴が催されていたアジトは、真っ赤なゴミ捨て場のような有様になっていた。

「それとも降伏するか？」

青年は大剣を肩に担ぎ、空いた左手をちよいちよいと動かした。
あからさまな挑発である。

「この……、調子に乗り腐ってええええ！」

おっさんは斧を拾い上げ、怒号と共に突っ込んでいった。

「——んんっ」

対して青年は一つ息を漏らし、担いでいた大剣をそのまま振り下ろした。

おっさんの斧は青年にかするどころか、大剣にかすることも出来ず、溜めの位置から微塵も動いてはいなかった。それだけ青年の打ち下ろしは速かったのだ。おっさんは怒りに満ちた顔を完全に二つに割られて、倒れた。

実力差からすれば、真つ当な結果だろう。

「ふー」

青年は軽く首を傾け、大きく息をつくとき、おっさんのズボンで大剣についた血糊を拭き取り始めた。ちなみに彼の服や鎧には返り血が一切ついていない。あれだけの乱闘の中、血を被らないという気配りが出来ていたということ、つまり余裕があつたということだ。

「はぁー……」

あまりに華麗な立ち振る舞いに、俺は思わずため息をついてしまった。

「――！！」

弾けるように顔をあげた青年の指はすでに紋章を描き終えている。あとは魔力を開放させるだけで、ハサー・テルプ＜貫く枯れ葉＞より2ランクほど上位の黒魔法――＜打ち抜く煉瓦＞が発射されるという状況だ。もちろん、俺に向って。

「――」

一言口に出すだけで撃ち殺されそうで、言い訳も出来ない。壁際に座り込んだ俺は、とにかく動かないことで敵意がないとアピールをするしかなかった。

少々の沈黙の後、紋章を俺に向けたまま、彼はそつと口を開いた。

「……手を挙げる」

「あー、縛られてて無理ッス」

刺激しないように、そろそろと背中側で縛られた両手を見せる。

「……人質か？」

「そんな感じ。というか、縄切ってもらえると嬉しいんだが」

「うむ。それもそうだな」

青年はそう言つて、発射寸前の黒魔法をキャンセルし、大剣を背中の鞘にしまつてくれた。

視線が合うだけで失禁しそうになる威圧感が消え、人の良さそうな笑顔になる。元がとんでもない器量なので、軽い笑顔一つで場の雰囲気をはらりと一変させるだけの威力があつた。

魔銃のように左脇の下に収めてあつた短刀を引き抜く。刃渡り20cmほど、やや透明感のある赤い刀身。相当な業物であることは、ちよつとした刃物マニア程度の俺にもよくわかつた。間抜けな人質の縄を切るには、勿体無いことは言つまでもない。

俺は手首をさすりながら立ち上がった。

「ありがとう、本気で助かつた」

しっかりと一礼してから、最後にぶつた切られたおっさんに向かう。

「——見たところ、新兵といったところか。どういう状況で人質になつてなつたんだ？」

「メシでも食おうと通りに出たら、盗賊団の方々がお出ましして、気がついたら捕まつてた」

「……情けない。それでも兵士か？」

「まだ訓練ひとつ受けてないんでね。——お、あつた」

おっさんのベルトから、俺の魔銃を抜き出す。幸いにも壊れたり血で汚れたりしてはいなかった。

「ああ、そういえば。それは何だ？　ほとんど動きなく黒魔法を撃ち出しただろ。新しい杖か？」

いつの間にか隣にいた青年が、聞いてきた。思わず苦笑しつつ答える。

「魔銃知らないって、どんだけ田舎者なんだアンタは」

「む……。や、悔しいが確かに世俗には疎い。特にここ百年と少しのことはほとんどわからん」

彼は顔をしかめた。どこか芝居がかつてるといつか、一々動作が

大げさなヤツだ。

「説明するのは構わないけど、先にとられた荷物を探させてくれ。旅の途中なんだ」

「ああ、それは災難だったな。僕も手伝おう」

これだけの容姿とあれだけの實力を持ちながら、なかなか気さくらしい。

彼に剣と荷物の特徴を伝え、無事だったランプを片手に、まずはアジトの中を探した。

一階部分は大したスペースもなさそうなのでとりあえず避け、二階の部屋を手分けして覗いて回る。汚い寝台と空になった酒瓶ぐらいしかなかった。

「どうも、ただの寝床らしいな」

溜息混じりの彼と共に、アジトから出た。

「うおう！？」

一歩踏み出したところで俺は思わず唸った。直径5mほどのクレターに、細切れの肉に、大ぶりな肉。ついでに、なるべく見たくない色んな物が散らばっている。

夜で良かった。

「……………あー、これはお前さんが？」

「ああ。空から集団が見えたんでな。そのままく**舞い散る毬栗**を、バモベクナッドこう、ドーンと」

なるほど、一度目の轟音はその時のものだろうく**舞い散る毬栗**は爆裂系の上位黒魔法だ。実際にはドーン程度では済まなかったことは、この惨状を見れば明らかである。

どうもコイツは自分の能力を正確に把握しているとは言い難い気がする。

気を取り直して、当たりを見回した。

今までいた母屋は中途半端に切り開かれた森の中にあり、獣道よ

りはいくらかしつかりした道が二方向に伸びている。いくつかの小さな小屋や崩れかけた厩などがあった。連れてこられた時には大した余裕もなく、ほとんど引きずられていたので気付かなかったが、どうも元々は木こりか兵士かが集団で住んでいたのではなからうか。結局一つ目の小屋は普通の家庭にもあるような物置だった。実用的な雑貨や大工仕事用の道具などが詰め込まれているだけで、金目のもの一つない。当然、武器の類もなかった。

「あー、何か面倒になってきたな……」

「ふ、君の荷物だろう」

文句を垂れつつ二つ目の小屋に入る。入った途端に外れだとわかった。生肉の匂いが鼻をついたからだ。

「で、ここは食い物の貯蔵庫、と」

「こついうものもどこから奪ってきたものなのか？ 非生産的にも程がある」

「生産するつもりがないから、盗賊なんてやってんだろ」

「それもそうだな」

軽口もそこそこにして三つ目の小屋に向かった。少し離れた場所にあり、かなり大きい。ただ、作りはかなり粗雑というが古くなつていてボロボロだ。

「お、当たりっぽい」

思わず口笛を吹いてしまう。青年は鼻を鳴らして吐き捨てるように言った。

「鉄……いや錆か？」

確かに小屋の中は独特な臭いで溢れていた。ランプの明かりでは端までよく見えない。それでも見える範囲には剣だの金塊だの宝石だの、光を反射するもので溢れ返っている。整理整頓という発想が一切ないらしく、まさにただ詰め込んである。これでは下っ端あたりがこっそり盗んでも誰も気付かないだろう。

「ここから君の荷物を捜すのは、ちと手間だな」

「や、多分この辺りにあると思う」

入口近くの小山を指差した。整理する手間すら惜しむ連中なら、奪ってきた物を分類したり、分散して収容したりすることもない。おあつらえ向きに『今しがたとりあえず置いておきました』感溢れる荷物の山があるのだ。

二人で小山を上から崩していく。

「これだけの量だと、盗まれた物を返すのも一苦労だな」

青年が宝石で飾られた腕輪を放り捨てながら呟いた。

「まあ、それはお上に任せておきやいいだろ。て、お前、どこかの警備隊とか守備部隊のモンじゃないよなあ？」

青年の鎧は隊などで配られる支給品よりみすばらしい。何より、そういう連中はどんなに強くても一人で行動することは少ない筈だ。『いいや。今の身分は完全にただの流れ者だ』

「ほー。じゃあ、何でこんな所に単身乗り込んで来たんだ？」

俺の質問に青年は軽く首を傾けた。意見をまとめているらしい。

「街に着いたと思ったら、火の手が上がっていてな。すでに盗賊団の襲撃を受けていたのだ。思わず剣を抜いて、幾人かは斬り伏せたが、結局本隊は仕事を終えて去ってしまった。火事を消すのを手伝っている、街の者から討伐を頼まれたのだ」

「で、追ってきたのか……」

「いや、正確な場所を教わったので、雷進とくトギルフ・タサフ空駆ける矢>で急ぎ駆け付けた」

雷進は、瞬間的に移動する為の歩法だ。達人ともなれば100mを一瞬で、なんてことも可能らしい。くトギルフ・タサフ空駆ける矢>は黒魔法の上位飛行術で、これまた相当な速度で空を飛ぶことが出来る。どちらも俺みたいな兵士見習いには憧れるだけの高等技術だが、この二つは組み合わせることで、さらに有用性を増す。黒魔法の飛行術は最高速度は素晴らしいものの、馬力と加速力においては精霊魔法や白魔法の飛行術に劣るのだ。その弱点を雷進は解消してくれる。十分に加速してから飛び立てるし、急な方向転換も足場さえあれば可能

になる。その速度は鳥よりもさらに速い。

「完全にボランティアで、しかもそれだけの實力とは」

流石に俺は感心した。俺が縛られたまま馬車に揺られ、小一時間尻の痛みに耐えていたのとは大違いだ。

「これじゃないのか？ ふむ、なかなかの業物。君には少しばかり過ぎた代物だな」

青年が少し鞘から抜いて眺めているのは、確かに俺の剣だった。魔銃同様、かなりいい物だ。鎧に関しては家の手前装飾過多になっ
てしまったので、武器に関しては少々我儘を通し、実を取った。その件で父上とさらに揉めたのも、今ではいい思い出だよ。

剣の下には、他の荷物を纏めたりユックサックも見つかった。盗られていた荷物が戻ってきただけで、嬉しくなるのは何故だろう。俺は鼻歌交じりで身支度を整えた。腰に巻くベルトの左に剣を下
げ、右のホルスターに魔銃を差す。

さて、どうやって帰ろうか等と考えていると。

「む」

青年が声をあげた。

「どした」

「気配が――、馬が……十五匹、車が三台、とそれより大きな何か。ヒトも十人ほど走っているようだ。ようやく憲兵が来たのかな？」
言われてみれば、足に小さな振動を感じる。もちろん俺に馬が何匹だの車が何台だのわかるはずもないが。はて、何か引つかかるよ
うな……。

「あー、質問が」

俺が口を開くと、物置の扉を開けようとしていた青年が振り返っ
た。

「ん、何だね？」

「雷進とく空駆ける矢トキルフ・タサフでここまで来たって言ってたよな。街からここまでどれぐらいにかかったんだ？」

「ふむ、そうだな。二十分といった所か……。何だってそんなこと――」

青年の言葉は、最後まで俺に届かなかった。

俺のいた町からこのアジトまでは馬でそこそこ急いで一時間、さらに先ほどの宴と合わせれば、盗賊団の連中が仕事を終えてから一時間半はかかっている。襲撃の終盤に居合わせ、そこから馬よりはるかに速い方法で駆け付けて二十分だと計算が合わない。

まだ何か言っている青年を制して、尋ねた。

「もう一つ。お前がさっきまでいた町の名前は？」

「確か……サートレイトだ」

「俺が捕まった町は、スチフマーダっていう村に毛が生えた程度のところだ。さっきお前の言ったような規模の自警団なんて、ありえない」

嫌な予感、ほぼ確信に変わっていた。

「ぬ？　つまり？」

「つまり、盗賊団は少なくとも二手に別れてた、ってことだわな」

1・出会い（後書き）

初投稿です。

忌憚ないご意見感想お待ちしております。

初稿9月9日

2・二つ目の卵

「つまり、盗賊団は少なくとも二手に別れてた、ってことだわな」

疑わしげだった青年の表情が、一瞬で精悍なものに切り替わった。
「ということは、もう一戦か」

「おいおい、ちょっと待って。こっちの方が本隊だと思うぞ」

地理にはあまり詳しくない俺でも、サートレイトは良くわかる。
次の目的地だったからだ。スチフマーダよりもはるかに大きな街で、
防備もしっかりしている筈だ。そこを襲えるのなら、それだけ人数
が多いか、精鋭で固めてあるか、あるいは装備がより良いか。

「こんな所に隠れていたって、すぐに見つかるさ。何より奴らはも
うすぐそこだ」

「げ」

確かに馬の蹄の音は相当大きい。機嫌の良い歌声や怒鳴り声まで
聞こえてきた。身を隠すにも気配の消し方など知らない俺がいては、
見つかるリスクの方が高い。

「またもや情けないことになってきた。」

青年がランプの火を消した。物置は暗闇に満たされる。彼は声を
落として言った。

「君はここに隠れている。また捕まりでもしたら、困るからな」

その言葉には若干の苦笑も含まれていたが、むしろ俺には氣遣っ
ているようにも聞こえた。

「出ていくにしても、もうちょっと策を練るとか——」

「残念、時間切れだ」

俺が止める間もなく、青年はすりとドアを開け、外に出て行っ
た。彼がドアを開けたことによって、盗賊団の気配が俺にも感じ取
れる。

というより。青年がやや開けた道の真ん中に立った頃には、すでに皆々様はご到着なさっていた。

「——っ！」

ドアの隙間から外を覗き込んだ俺は、息を呑んだ。

人数など規模は先ほど青年が言っていたので、十分覚悟を決めていた、つもりだった。しかし、三十人以上の人間、十五頭ほどの馬、三台の馬車以外に、巨大なオルトロスがいては、衝撃を受けても仕方がないと思う。

オルトロスは二つの頭を持つでかい犬だ。背の高さで3m半ほど、頭を持ち上げれば5m近くにもなる。動きは俊敏で、二つの口はヒトなら一撃で噛み千切れる大きさがある。戦闘力の割りに扱いやすいことから、騎獣部隊なんかではちよくちよく見かけられるらしいが。

このランクの魔獣を盗賊団が飼っているなんて話は聞いたことがない。

「頭ア！ あれ！」

松明を持った男が大声を張り上げた。一斉に止まる馬と車。半数以上がすでに武器を取り出している。

青年が、盗賊団の連中からの明かりにぼんやりと照らされる。その顔は無表情だった。

怯える馬を押しつけるようにしてオルトロスがゆっくりと前に出てきた。その首には首輪が、背には鞍がつけられていた。

「誰だ、貴様」

鞍に座っている大柄な男が言った。顔つきからすると、こいつがこの盗賊団の首領だろう。ギラギラとした目と、顔やむき出しの腕に走る傷跡が、潜った修羅場の数を示している。

オルトロスは良く躡けられているのか、一息で飛びかかれる距離でぐるぐると唸り声を上げた。

俺なら震え上がり小便漏らすこと確実な場面でも、青年はすつき

りと背筋を伸ばし、やけに芝居がかった声で堂々と答えた。

「悪党に名乗る義理はない。後ろの仲間共々、己の悪行を悔いながら逝くがいい」

青年の台詞は、盗賊たちを本気にさせるには充分だった。

「ああっ!？」

「おい、見てみる！あの生首、ありやテムズだぜ！」

「それだけじゃねえ、ブルも、サンチエスも！」

青年の後ろに広がる現場が目に入ったのか、怒りと苛立ちがざわめきと共に広がっていく。しかし、それでも盗賊たちは武器を構えただけで、動こうとはしなかった。全員が動く前に、オルトロスに乗った男を窺っている。

マズイ。

こいつらさっきの奴らよりも統制がとれている。よく見れば、大雑把ながら役割分担もしているらしく、比較的青年に近いほうは剣や斧を持ち、後ろのほうは弓や魔銃で武装していた。

頭目と思しき男は、呆れた様にため息をつく、口を開いた。

「——用意」

近接武器を持った連中が、一斉に左右に散った。動かなかった者はすでに弓を引き絞るか、魔銃を構えている。

青年は大剣を肩に担ぐようにして真っ直ぐ立ったままだった。

「——うてエ！」

矢が十五条ほど、魔銃による黒魔法が五発ほど、放たれた。

青年の反応はやはり化け物じみていた。大剣を思い切り地面に叩きつけたのだ。地面が捲り上がり、轟音が響き、大量の土と石の壁がほんのつかの間立ち上がる。

少し離れていたからか、青年の動きは何とか見えた。

一部の矢と魔法は即席の壁を突き抜け、交錯するが、すでにその場に青年はいない。彼は、捲り上げた地面をくまみにして、かなりの距離を飛び退いている。そして、避けたと思ったときには、正面のオルトロスに向かって突っ込んでいた。

盗賊団にしてみれば、土煙の中から突然大剣が飛んで来たようなものだろう。大した軍事訓練を受けていない奴らなら、この一手で詰みだ。

しかし、オルトロスは反応した。

「グワウッ!!」

青年の横薙ぎをすれすれでかわし、二つある頭で噛み付こうとする。

「ハッ!!」

鋭く笑うように息を吐いた青年は、やはりぎりぎりで二つの顎を避けた。

それでもオルトロスは追撃した。交互の噛み付きは、息つく暇もない連続攻撃になっている。まるで金属と金属をぶつけるような音が何度も何度も繰り返された。

オルトロスの背中で振り回されていた頭目は、いつの間にか気持ちを立て直したのか、部下に向かって怒鳴った。

「者共、こいつの足を止める！ 手段は選ぶな！」

その台詞に、部下たちは武器を握りなおし、位置を確かめ、攻撃のタイミングを窺い始める。

そして、俺も我に返った。

青年がとんでもなく強いのはわかっている。しかし、アジトの中での大立ち回りがあそこまで一方的だったのは、相手が組織としてバラバラだったことや奇襲が成功したことが、大きいかもしれないのだ。そこそこの指導者がいる連携の取れた相手にどこまでやれるのかはわからない。その上、オルトロスまでいる。

飛び出していつて格好良く助ける、なんていうのは論外だが、何人かの注意を俺に向けさせることならできるかもしれない。いや、伏兵の存在を臭わせる程度でも助けにはなるだろう。

俺はわざと音を立てながら、小屋の奥へ移動した。実際のところ、心臓はバクバクだ。

ギリギリ物の輪郭がわかる程度の月明かりの中、決定的な音だけは出さないよう注意して歩きつつ、何か武器になるものを探す。出来れば魔銃やクロスボウなど、飛び道具がいい。

さらに贅沢を言わせてもらえば、魔法爆雷などがあれば派手に場を引つ掻き回せるのだが。精霊魔法や黒魔法を魔力と共に封印した魔法爆雷は、手に収まるぐらいのガラス玉のような外見で、ちょっとした衝撃で封印された魔法が解放されるアイテムだ。対象に向けて投げたり、地面に埋めて罠として使ったりする。

しかし、そんなうまい話が転がっているわけもなく。そもそも武器がありません。俺のように武器を持つている癖に強奪されるような間抜けはそうはいなかったのだろう。

外の様子を窺う。音や声から判断すると、戦闘はまだ続いているようだ。しかし、こちらに注意が向いている気配はない。

ふと、棚の一つに目が行った。かすかな月の光を反射した、玉がある。大きさは子供の頭ぐらい。黒い下地に、筆で赤い線を何本か入れたような表面。丸いといえば丸いといった程度で、完全な球体とはいえない。盗賊団のかなりいい加減な保管の中、これだけは転がり出さないように台座にすっぽりと納められていた。

何かのアイテムだろうか。もしかしたら役に立つかもしれない。俺は屈み込んでその玉にそっと顔を近づけた。

カチリ、と。顔を近づけた瞬間、音がした。

慌てて辺りを見渡すが、何か音を出すような物は見つからない。それに外の様子も、戦闘はまだ続いているようではあるものの、大きな変化は感じられなかった。カチリ。残る可能性は目の前の玉しかない。カチリ。さらに鼓動が速くなるのと同時に、周りの世界が

縮まったような感覚。パキパキ——お、音が変わってる——パキン。磨き上げられた石のようだった玉に、天辺から下へ大きな亀裂が走る。

パゲン。

玉が真ん中から二つに割れた。中に黒っぽい何かが入っていたようだ。

高い位置にある明かり取りから、より強い光が差ししてきた。月が雲から出てきたのだろう。

俺はその光を頼りに、さらに顔を寄せる。

「ク……アア」

ソイツが、鳴いた。

玉——いや卵の中にいたのは、トカゲのようなモノだった。体色は黒で、背中に蝙蝠のような小さな翼、頭にはやはり小さな二本の角が——ってどう見てもドラゴンじゃねえか！

小さなドラゴンは伸びをするように体と翼を伸ばした。大きさは子犬ぐらいだろうか。広げても翼は小さい。顔立ちは、一般的なドラゴンのイメージほど面長ではなく、どちらかと言うと哺乳類っぽい。しかし、その身を覆うのは黒い鱗で、頭のとっぺんから尻尾まで赤い毛らしきものがある。

「……」

俺は言葉を失っていた。事態がいい方向に向かっているのか、酷い方に転がっているのか判断がつかない。この小さな生き物を利用して何ができるか考えるべきなのだろうが、あいにくとコイツがどんなドラゴンの子供なのかもわからないのだ。俺の地元——ラチハーク王国では魔獣を戦力に組み込む方針を未だに拒否し続けている。結果、国内全体で魔獣に対する関心は狩り方のみであって、生態や成長の仕方などは研究調査をしていないと言っている。そんな国で育った俺に、どれだけの種類があるのかわからない龍種の、それも

子供について判断しろというほうが酷だ。

実際に頭を抱えて唸っている俺を、ドラゴンが見た。目が大きい。ご婦人に喜ばれそうな愛らしさがある。しかし、かすかに開いた口には、やけに鋭い歯が見えた。尻尾をゆっくり振っているので機嫌は良さそうなんだが……。

「クア、クア——」

ドラゴンは奇妙な息遣いで口を開いたり閉じたりし始めた。

「——クチンツ」

可愛いクシャミが聞こえたのと、俺の左の耳元を赤い光の筋が通り過ぎたのと、俺が、熱ッ！と思ったのが同時だった。

結果として、俺の命を救ったのは、子ドラゴンのクシャミの角度だった。もしかしたら、顔面にクシャミを吹きかけるのは失礼だと気を使ったのかもしれないが、生まれて一分足らずの生き物にそんな憤みがあったとも思えない。つまりたまたまだったということだろう。

ドラゴンはクシャミと共に光線だか熱線だかを吐き出したのだ。

その赤い光は、俺の顔面左スレスレを通り、小屋の扉を音もなく貫通し、凄まじい振動を巻き起こした。背後から聞こえたのは音というより、圧力だった。実際、俺がいる小屋は地震でもここまではないだろうという強さで揺れる。

俺は思わずしゃがみ込んだ。

適当に置かれていたお宝の類は棚と言う棚から落ち、床につまれているお宝は崩れ、あっちこっちに散らばっていく。ついでにバキバキと木材が割れる音がした。見れば、扉側の壁はほとんど吹き飛んでいる。焦げ臭い熱風が吹き込んできて、息が出来ない。

「あつ、テメー！」

気付くと、ドラゴンはしゃがみ込んだ俺の膝あたりに避難してい

た。人懐っこいのか親だと思っっているのか、ともかく今のところ俺に危害を加えるつもりはないらしい。

「……っ！ アイツは！？」

思い至って立ち上がると、小屋の外は火の海だった。空気までもが暑いというより、熱い。炎の踊る地面近くには、何か黒っぽいものがたくさんある。ただ、目を凝らしてそれが何か確かめようとは思わなかった。

動いている人影は見えない。どれだけ爆發だったのか火炎だったのかは不明でも、結果としてこんな場面を見せつけられると、青年が死んだ可能性を考えない訳にはいかなかった。自分でも驚くことだが、俺はショックを受けていた。彼の人柄に好感も持っていたし、その圧倒的な強さに敬意も抱いていた。出来ればもう少し話をして、食事の一つも奢りたかった。

「……」

へこんではかりもいられない。さっきの衝撃でガタが来ているだろうし、いつ燃えるとも限らない小屋は危険だ。気合いを入れて外に出る。とりあえずドラゴンの子供も抱きかかえて持ち出してやった。さっきの光線はおそらく事故のようなものだろうし、悪気や敵意もなかった筈だ。コイツが火に強い種類かもわからないし、小屋が倒壊したら下敷きになるかもしれない。

小屋から抜け出したはいいが、呆然としてしまふ。これからどうしよう。火とか消したほうがいいだろうなあ。井戸から水汲んでコレ消すのどれぐらいかかるかなあ。つか本格的に森に火が移ったら俺死んじゃうだろうな。馬でも盗んで逃げちゃおうかなあ……。

「クアー」

俺の後ろ向きな思考を断ったのは、ドラゴンの鳴き声だった。鼻先を向けている方を見ると、黒いビロードのようなものが綺麗な半球状に渦巻いていた。確かこんな上位結界が黒魔法にあった気がする

る。俺はまだパチパチいつている炎を避けつつ、慌てて走り寄った。
「——おいっ、生きてるのか！」

「ああ。かなり驚いたが、何とか間に合った」

青年の声だ。しかも、えらく涼しげ。そしてスルスルと黒魔法の結界術がほけていく。現れた青年はまたもかすり傷一つ負っていない。小屋の中での俺の気遣いなど、彼には無用だったのだろう。ドラゴンの光線の方がよっぽど危険だったに違いない。

「ふむ。君にも怪我はなかったようだな」

「ああ。耳の端っこに小さい火傷ができたくらいだ。コイツのせいだな」

青年の前にドラゴンを持ち上げる。途端に青年の顔がフニャツと崩れた。

「ん……？ おお？ か……可愛い……」

「確かに可愛いかもしれんが、さっきの光線と爆発はコイツのクシヤミだぞ」

俺の皮肉も青年には通じなかったらしい。ドラゴンに指を差し出したり引っ込めたりして遊んでいる。まあ、あれだけの戦闘力があるなら指を齧り取られることもないだろうが。

一息ついて辺りを見回すと、炎はほとんど治まっていた。爆発の範囲内にあったものは燃え尽きてしまったのだろうか。チロチロと小さな火もあるにはあるが、これぐらいなら踏み消して回れば十分だ。

どう行動するにしても、このまま彼とドラゴンに遊び続けられても困る。俺は青年に呼びかけようとしてまだ名前も聞いていないことに思い当たった。

「あー、そういえば名前は？」

「ん？ この子のか？」

「違う。お前さんの名前だよ」

デレデレ顔のまま言った青年に思わずツッコんでしまった。それ

でもボケてるつもりはないのだろつ。これまでの会話で冗談が言えるヤツとも思えない。

俺はさっさと話を進める為に自分から名乗った。

「ああ、俺も名乗ってなかったな。ラチハーク王国メイプラ子爵の子、カインド・アスベル・ソーベルズだ」

軽く一礼した俺に対し、青年は右の拳で胸あての中央を叩いた。

「僕の名は、ルース——、ルース・アーガード。ただのルース・アーガードだ」

奇妙な自己紹介をする青年——ルースと、俺はかなり強く握手をし合った。ドラゴンが尻尾を揺らしながら、俺たちの手に鼻を寄せた。

これが、俺がドラゴンみたいに強い奴とどんな種類かわからないドラゴンとに出会った顛末だ。

2・二つ目の卵（後書き）

初稿 9月10日

3・街と憲兵

目覚めは最悪だった。

「……—いい加減、起きないかつ！」

「ぐほう！？」

「グアン！？」

腹に激痛を感じ、跳ね起きる。

一緒に寝ていた子ドラゴンも俺の勢いに巻き込まれ、ベッドから落ちて声を上げた。

「な、何てことをう……！」

夜更かし大好き貴族の次男坊である俺は、基本甘ちゃんお坊ちゃんだ。睡眠不足には弱い。そして、ぐっすり眠っている人間の腹を殴るような奴に出会ったこともない。

しかし、俺の涙目の抗議は、ルースの真っ直ぐな瞳に届かなかったらしい。やけに背筋を伸ばし、腰に手を当てて言い放つ。

「僕は五歳ぐらいの頃からこうして起こされた。すぐに体が慣れて自然と目が覚めるようになる」

「なんつースパルタだよ……」

「とにかくおはよう、カインド。君もな、ドラゴン君」

「クアー」

「……はあ。ああ、おはよう」

溜息混じりに朝の挨拶を済ませ、窓を見ると、まだ朝の日差しだった。実質三時間も寝てないんじゃないだろうか。

昨夜、あれから。

俺たちはまず後始末の問題でちょっと議論をするはめになった。ルースが遺体の埋葬をしたがったのだ。俺としては早く温かいベッ

ドに行きたかったので、その辺りは憲兵隊の仕事だと説き伏せるしかない。何とか納得して貰えたと思えば、今度はドラゴンの処遇だ。魔物を飼うのは、それが例えば子供であっても危険なことだ。俺は森の中なら何とか生きていけるだろうと、もう一度説得したが、今度は梃子でも動かない様子で断固連れて行くべきだ、と言う。ああだこうだ言っている内に、やがて俺が根負けした。眠かったのだ。

という訳でドラゴンを、ここサートレイトへ連れてきてしまった。

常にかまいたがるルースの方が馴れそうなもののに、ドラゴンは俺のそばから離そうとすると暴れた。盗賊団の厩からちよるまかした馬に乗る頃には、俺のベストについたフードを自分の巣と決めたらしい。ルースは黒魔術でもっと早く帰ることができるようになる。自分も馬に乗って、俺の後ろからドラゴンに声をかけていた。

暗い森の中を、月明かりと松明を頼りに進むのは、道があつて馬に乗っていようと大変だった。街に着いたはいいが、当然門がしまっている。襲撃後ということでした。しっかり起きていた門番とちよつとした口論になった。最終的には俺の貴族としての身分をちらつかせることで無理に入り込んだようなものだ。

最後には宿の確保という問題が。ようやく遅くまでやっている酒屋を見つけ出して、その片隅に二人と一匹が押し込められたのは、そろそろ空が白んでくる頃だったのだ。

「さあ、憲兵隊の詰め所に行かなければ。街の人々を安心させるのは一刻も早いほうがいい」

やけに元気なルースは報告の為に、こんがり焼き上がったオルトリオスの牙を一つ、わざわざ持ってきていた。昨日の夜、彼が素手で大きな牙を引き抜いた時には度肝を抜かれたものだ。

酒屋の親父に二人分の宿代を払い、心からの感謝を伝えてから、憲兵隊の詰め所を目指す。

サートレイトはかなり大きな街だ。通りは馬車がすれ違ってもなお露店を広げるスペースがあり、石畳は近くの間人が掃除でもしているのだろう、清潔だった。そろそろ店を開こうとする人々や巡回に出ようとする下っ端兵士たちの姿が見える。

見渡せば、火事の跡らしき焼け焦げや、割られた窓ガラス、ブチ破られたドアなどが散在している。ただ、昨日の襲撃で少し興奮は残っているものの、すでに日常が戻りつつあるのも見て取れた。

「あー朝日が眩しい……」

「ふふ、まったく、だらしないな。そういえばカインド、このドラゴンに名前は付けないのか？」

「まだ飼うって決めた訳じゃねえよ……」

とは言え、俺のフードにはドラゴンが納まっている。とりあえず連れて来てしまったものの、コイツの扱いも難しい。ルースがお氣楽にペット気分で可愛がっていても、ドラゴンはドラゴンだ。しかも盗賊団の倉庫にあった卵から孵ったもので、いくら懐いていたって所有権を主張することは出来ない。例えば、卵がこの街の誰から奪った物だった場合、返せと言われればドラゴンは返すしかない名前など付けてしまえば情が移るに決まってるんだ。候補がないこともないが……、呼びかけたら最後、死ぬまで世話する覚悟を決めなければならなくなる。

まだグチグチ言っているルースをのりくらりとかわしているうちに、詰め所に着いた。

その途端に。

「——失礼する！ 責任者は誰だ？」

「あつ、オイ！」

止める間もなくルースが乗り込みやがった。

この街の規模だ、憲兵隊の詰め所も普通の家より大きい。鎧兜姿の十数人が一斉にこつちを振り返った。

「昨日、この街を襲撃した盗賊団について話がある。責任者を呼ん

できて欲しい」

「何だお前は？」

手近にいた若者がルースに詰め寄って言った。俺とルースより頭半分背が高い。突然の訪問者に気後れしない態度といい、上から視線といい、憲兵としては素質十分だ。

しかし、ルースの胆力はその辺の憲兵などはるかに超えた本物である。

「昨日の襲撃に居合わせた流れ者だ。あの盗賊団は、我々によって、すでに全滅している」

まあ、簡潔な説明。

俺はだいぶ慣れていても、ルースの容姿は戦士というより役者の方がしっくりくる。そんな美形が言っているのが、盗賊団をツブしてきた、だ。悪ふざけか頭がおかしいか舞台の度胸をつけようとしているか、向こうの取り方としてはそんなところだろう。

案の定、憲兵たちは苦笑交じりで吹き出した。

「おいおい、奴らはオルトロスまで連れていたんだぞ？」

「ハッ。お前さんが全滅させられるなら、俺達でヴァレンセンを攻め落とせるぜ」

口々にあだこうだと話し出す。ヴァレンセンは軍事国家で苛烈な攻撃をすることと有名な国だ。要するにルースは馬鹿にされている。ちらりと彼を盗み見れば、ああ、こぶしがギリギリいつてます。「落ち着け。問題を起こしに来たんじゃない」

「……わかつている。とにかく責任者を読んで欲しい。証拠もあるんだ」

ルースは背中に背負ったズタ袋から、まるで棍棒のようなオルトロスの牙を取り出した。

さすがにこれで話を通じるだろうと思っていたが。

「フン、こんなモンをそれ見たことかと出されてもな」

「ブハハッ、小道具まで用意してるたあ、悪ふざけにしても凝り過ぎだろうよー!」

全員で腹をかかえて笑い出す。

しかしあれだけの規模を持った盗賊団に関する事なのだ。些細な情報でも欲しいと思わないのだろうか。ルースほどではないが、俺ですらもう少し真面目に仕事をこなしてもらいたいと思うてしまふ。

恐る恐るルースを見ると、今度はやけにあっさりした顔で、呟いた。

「良くわかった……」

「ほおー、俺たちに迷惑かけてるのがわかったのかい。だったらすぐにお家へ帰って——」

初めに応対した兵士は最後までしゃべることが出来なかった。

「——貴様らの、愚かさがだっ！！」

ルースが、詰め所も壊れるかと思うほどの大声を出したのだ。昨夜の戦闘ですら、ここまでの声は出していない。ビリビリと空気が振動する。

俺はといえば、ルースの沸点の低さに驚いて制止することも出来ない。

静まり返った憲兵たちを見渡し、ルースの大声は続く。

「先入観から疑いを持つのは構わない。だが、それでも態度というものがある。一人ぐらいいは真面目な対応が出来なければ、有益な情報でも取りこぼしてしまうだろう！ 貴様らの職務怠慢はそのままこの街の損失に繋がる！ 襲撃を知らせる報があつたとしても、貴様らはそこで笑っていられるのかっ！！」

実に堂々とした演説は、街の人々を呼び寄せた。ちらほらと通りからこちらを覗き込む視線を感じる。俺としてはあんまり大事にならないようにして欲しかったんですけど……。

憲兵隊が殺気立つ中、詰め所の階段からやけに太った男が姿を現した。

「何なんだ、この馬鹿騒ぎは!？」

今までの連中に輪をかけて偉そうだった。高そうなマントやキツチリ刈られた髭など身なりは良くても、その体つきは運動が得意ではないと如実に語っていた。というかお前の右手のジョッキこそ何なんだ。

「――あ、隊長」

「こいつらが昨日の盗賊団をツブしたとか言うもので……」

のしのしと部下をかきわけ、ルースの正面に立った隊長は、長々とジョッキを呷ってから口を開いた。

「――ふー。こちらも暇ではないのだ。ウソや冗談でからかうなら他所へ行け」

うわ、超酒臭え。朝から仕事場で酒呑んでるのか。
俺とルースは顔を見合わせた。

「責任者までコレじゃあなア……」

「怒りを通り越して、呆れるしかないな」
いい加減挑発しすぎたか隊長が出て来たことで勢い付いたか、憲兵たちが一歩踏み出して来る。

隊長は詰め所の奥へ向かいつつ、投げやりに腕を振った。
「腕の骨を一、二本折ってやれ。そうすれば少しは頭が良くなるだろう。ただし面倒はごめんだ、殺すなよ」

じわりじわりと迫ってくる憲兵たち。顔には薄笑いを浮かべ、こぶしをポキポキ鳴らす様子は、チンピラと大差ない。昨夜の、頭目に率いられていた盗賊たちの方が、よっぽど連携がとれていた。

ルースはため息を吐いて、言った。

「……身をもって学んでもらうしかないようだ」

その言葉が終わる前に、手近にいた憲兵二人が飛んだ。後ろの男を押しつけるようにして、床に転がっていく。

「ぐう、はあっ……」

「うつ……ぐうつうつ」

腹を押さえて呻くしかない憲兵たち。恐れ慄くその他大勢。隊長

に至っては、木製のジョッキを落としていた。

ついに手を出してしまったのね。相手は一応お国に任命された憲兵たち。流れ者の君は今後近付かなければいいのかもしれないけれど、俺は年一ぐらいでこの国通らなきゃいけないんだ。お尋ね者とか本当に勘弁してほしい。あと、朝のアレは思いつきり手加減してくれてたんだなあ。

俺が現実逃避している間にも、ルースの大立ち回りはしっかり続いていた。

「その痛み、しかと思い知れ」

ほとんど適当にしか見えない動きで、一人一人的確に攻撃を加えていく。大体が腹を殴られるか、脇腹を蹴られた。恐ろしいことに、彼はその場からほとんど動いていない。良く見れば、誰一人気絶すらしていなかった。その上、血の一滴も流れていないのだ。床に這いつくばった憲兵たちは一様に腹を押さえて呻き続けている。

事が終わるまでに要した時間は、一、二分。唯一攻撃を受けていない隊長は、それでもさつきまでのほろ酔いがいつぺんに冷めてしまったらしく、顔を真っ青にして震えていた。

「さて、隊長というからには当然他の者よりは強いんだろう？」

ルースが怖い顔で隊長に詰め寄ろうとしたので、ようやく我に返った俺は、前に出た。ありったけの自制心を動員して、極々冷静に見えるように取り繕う。

「はい、ストップ。落ち着けて言っただろ」

「しかしっ」

「もう相手は十分に面子潰されてるよ。これ以上はやりすぎだ」

この時点で、何の後ろ立てもなければお尋ね者になってもおかしくない状況だ。とりあえず交渉の余地は残しておいた方がいい。

震えが治まらない隊長に向き直る。

「盗賊団の壊滅は本当なんです。運悪く居合わせました」

「……」

未だにショックから抜け切れていない隊長は、馬鹿みたいな顔で黙ったまま。今のうちに情報を詰め込んでおこう。

「まずは彼の無礼をお詫びさせてください。何せ、この通り武骨者でして。ですが、彼の言葉は、この街の平和と繁栄、そして皆様の輝かしい名誉を望んでのこと。どうか、そのことはわかっていただきたいのです」

ルースを盗み見ると、顔を真っ赤に、目を三角にしている。俺は隊長と彼の間をさりげなく遮って『まあ待て』の意思表示をする。

「……………う……………うむ」

「寛大なお心遣い、感謝いたします」

「ああ、まあな」

先に頭を下げて、ただの相槌を言質に変えることに成功。

「さて、その時の状況を説明させていただきます。私自身は捕らわれていましたし、私の護衛は奴らと、いざ剣を交えようとしたところでした。よって正確なことはわからないのです。しかしながら、とんでもない爆発が起こったことだけは確かです」

「——爆発？」

「はい。学のない私には、何が起こったのかわからないほどの爆発でした。それにより、大半の盗賊共は焼死しましたし、運よく残った者も、この、私の護衛が斬り捨てました」

そう言つてルースを指し示す。

「……………そうか、爆発か……………」

「奪われていたと思しき品物は、おそらくですが、ほぼ無事です」
そこで少し間を開け、隊長にギリギリ届く程度に声を押さえる。

「我々は通りすがりの身の上ですので、これ以上の干渉は致しません。よって、盗賊団の壊滅も財宝の奪還も未だ手付かずと言つていいでしょう。私としては——事は急を要する、かと」

隊長の目に、理解の光が見え始める。俺は、手柄はいりませんよ、と言っているのだ。

「……………うむ。わかった。急いで確認させよう」

「迅速なご判断、感服いたします」

これで問題はないだろう。やや回り道はしたものの、こっちの要望は通った。

「ただし、確認が済むまでこの街から離れてもらっては困る」

「……………はい？」

「個人の判断では嘘は言っていないと思うが、念の為だ。それとも何かマズいこともあるのかな？」

ルースを見れば、諦めなのか呆れなのか、軽く目をつぶったままの無表情だった。何も意見がないということでもいいだろう。俺としても、まあ、余裕のない旅でもないし。

「わかりました。我々の出発は明朝にいたします」

「うむ。今日の夕方には確認も終わっていよう。もう一度ここに来てくれ」

「では、お時間を割いていただきありがとうございました。失礼いたします」

少し強引にルースの背中を押し、二人で頭を下げた。

俺たちはさつさと詰め所を後にしたが、まだ呻いている憲兵を怒鳴る隊長の声が、しっかり聞こえてきた。

すでに集まっていた人々もそれぞれの仕事に戻っている。

「あそこまでこちらを侮辱しておきながら、詫びの一つもなく、その上、また来い、だと……………！」

わりと良くやったつもりだった俺の横で、ルースは不満をぶちまけている。

「君も君だ！ 何だ、あのへりくだった態度はっ！？」

「グアー！」

さっきまで大人しくしていた子ドラゴンと一緒にあって、矛先をこっちに変えてきやがった。このドラゴンはわりと空気を読むといつか、まるで言葉がわかつてるように見えることがあるな。

「結果で見れば、明日まで出発出来ないこと以外、上手くいっただろうが……」

「君は子爵令息だろう！ 普通、貴族はもっとプライドを大事にするんじゃないのか!？」

「そんなプライドは旅をする上では邪魔だね。大体、俺は権威をチラつかせるつもりだったのに、さつさと乗り込んでケンカ腰になったのはお前じゃねえか」

「ぐっ……」

それでも、隣国で我が家の権威が通じたかどうかは微妙なところだ。ここ——ルークセント王国は、俺の母国ラチハークから見ると北に国境を接する。あの隊長がウチの家紋を見て、貴族だと気付く保証はなかったんだが、それはルースには伏せておこう。

「ま、あの演説には、俺もスカつとしたけどな」

俺がそう言っても、ルースはまだ機嫌が晴れないのか、顔をしかめていた。

充分に憲兵の詰め所から離れたことを確認して、俺はルースに尋ねた。

「で、一日縛られちまったけど、どうするよ？」

「ああ、あの人にも報告しないと」

「あの人って？」

答えるよりも前に、ルースはさつさと道を曲がった。

「盗賊団が襲ってきた時に、僕に助けを求めた女性だ。奴らのアジトを教えてくれた。彼女と会ったのは、門の近くにある料理屋だったから、そこに行ってみよう」

3 街と憲兵（後書き）

初稿 9月11日

4・少し早い昼食

——ルースに助けを求め、盗賊団のアジトの場所を教えた、料理屋の女性。

俺はその台詞から、美形で強い戦士と気立てのいい看板娘の、ちよつとしたロマンスを想像した。後々、町を救った英雄を語る時に、彩りを加えるアクセントになるような。

「盗賊団のアジトを知ってるつてのも物凄い話だな。俺なら何か裏があるんじゃないかと勘繰るぞ」

「いや、その店にいた全員が口ぐちに肯定したんだ。どうも何度か襲われていて、町民たちで居場所を探ることまでやったらしい」

何だそりゃ？ そんな状況で憲兵は何もしなかったと言っただろうか。

「僕が食事をしていたら、三人ほど乗り込んで来てな。そいつらを叩きのめしたら、その女性が涙ながらに助けて欲しいと言う。周りにいた者たちも拝むように頼みこんでくる。そんな心からの訴えを退けることなど、僕には出来ない。その後は君も知つての通りだ」
何という直情かつ待ったナシの一直線。しかし、ルースのそういう性格で助かった身としては、軽口も言えない。

「で、それを報告、か。明日になればさすがに憲兵たちから話が広がると思うが……」

「一刻も早く安心してほしいし、何より、あんなぐうたらした連中に任せておけないっ」

意気込んで早足になるルースを追いかけて辿り着いたのは、かなり大きな料理屋だった。とはいえ、今は朝食には遅く昼食には早い時間帯で、客はちらほらとしかいない。厨房からは賑やかな声が聞こえてきても、給仕のお嬢さん方はやや手持無沙汰な様子。

この中に、ルースが言っていた女性がいるのだろうか。

店員たちは一様にルースから目が離せなくなっている。一番近くにいた赤毛の子などは、腰が抜けてしまったのか床にへたり込んでしまったぐらいだ。

「ああ、アンタ！ 無事だったのかい！？」

しかし、彼に声をかけたのは、孫が十人ぐらいいそうな老婆だったわけだが。

ばあさんは皺くちやの顔に驚きと安堵の表情を浮かべ、テーブルを弾き飛ばすように走り寄ってきた。しっかりと彼女を受け止めたルースは優しい笑顔で、頷いた。

「もちろんだ。盗賊団は一人残らず死んだ。憲兵たちと一悶着あったが、今頃確認に出発しているだろう」

「昨日は思わず助けてくれなんて口走っちまって。後でよく考えてみたら、何てことを言っちまったんだろうって後悔するやら心配になるやら……ああ、どこにも怪我はないかい？」

ばあさんがあと五十年ほど若ければ、非常に絵になったであろう光景だ。それだけに惜しい。もったいない。

「ああ、大丈夫。取り急ぎ報告をしないと、と思い訪ねただけだ」

「クソ憲兵どもに聞かせたいねえ、その台詞。それで、コチラは？ 昨夜は一人でいたようだったけど」

頬を涙で濡らした老婆は、笑顔になると、俺を見た。完全に添え物扱いだが、事実その通りだ。

「奴らに拉致されていたんだ。何だかんだと道連れになってしまった、といったところか？」

「大変な危機的状况を電光石火で助けてもらいましたよ。貴女が彼に助けを求めなければ、今頃はどんな目にあっていたか……」

両方を立てる言い方で面倒な説明を省略した。俺の間抜けな醜態をわざわざ話すこともないだろう。

「そう言ってもらえると少し気が楽になるねえ。アンタたち、時間はあるかい？」

思わず俺とルースは顔を見合わせた。

「危険な頼みをしちまった分には程遠いかもしれないけど、せめて感謝の気持ちを受け取って欲しいんだよ。好きなだけ食べておくれ」

「いや、しかし、そういう訳には……」

「何、昨日アンタがいなかったら、どれだけ被害があつたかわからないんだ。これぐらいしか出来ないババアの我儘を聞いておくれ。そっちの人もついでだよ」

ルースの遠慮をばあさんは満面の笑みで一蹴した。

「ほら、いつまでもサボってないでっ、さっさとこの二人にありつたけの料理持つてきな！」

ばあさんの一喝で、ずっとルースに見惚れていた給仕たちが我に返った。一目散に厨房へ向かっていく。

ここまでされたら断るわけにもいかない。俺とルースはもう一度顔を見合わせると、どちらともなく苦笑してテーブルについた。

運ばれてきた料理は種類が豊富で、本当に感謝を示しているのが良くわかった。分厚い牛肉やたくさんの野菜が煮込まれたスープなど、素朴でありながら材料の味を良く引き出している。今までの旅ではそれなりに金をかけていて、当然出される料理も豪華だったが、それが馬鹿らしくなってしまうほど、ここのメシの方が美味い。

「グウー」

一通り味を楽しんだ頃、俺のフードで大人しくしていたドラゴンが恨めしそうな鳴き声を上げた。そういうえば、昨夜から何も食べさせていない。

ちようど別の料理を運んできたばあさんが目を丸くして言った。

「おや、魔獣持ちだったのかい？ 人は見かけによらないってのはホントだね」

「……ここで食べさせるわけにはいかないですよねえ？」

恐る恐る尋ねると、ばあさんはあっさり首を横に振った。

「いんや、ルークセントでは魔獣持ちはそれほど珍しくないんだ。さすがに大きいのはお断りさせてもらうけど、これぐらいだったら四六時中店ん中で飲み食いしてるよ」

恐るべし、ルークセント。さすが騎獣部隊を早くから取り入れた国だけある。

お言葉に甘えて、隣のテーブルにドラゴンを降ろした。目の前の料理から何をやるうか選ぼうとして、コイツが何を食べるのか一切知らないことに気がついた。

「ド、ドラゴンの子供は何を食うんだ？」

「ふーむ。とりあえず色々置いてみて、この子に選ばせてみればいいんじゃないか？」

んな乱暴な、とは思ったが、結局ルースの提案以上のものは思い浮かばなかったので、肉や野菜、ついでにミルクと水などを小皿に盛り分けて、ドラゴンの鼻先に近づけてみる。

結果として——、何でも食った。

「か、可愛い……けどっ、どうして僕からは何も食べてくれないんだっ!？」

いちいち感動するルースが差し出す肉には目もくれず、今は俺が皿についてやったミルクを細い舌で舐めとっていた。コイツは俺たちが皿に取り分けるところをジッと見ていて、俺が用意した物は肉から野菜から物凄い勢いで口に入れていくのに、ルースの方はチラ見するだけで匂いすら嗅ごうとしないのだ。

「やっぱ、俺のこと親だと思ってんのかなあ……」

「うっ、絶対、カインドよりも僕の方が可愛がるのに」

いや、何故俺を睨む。こんな強い奴にこんなことで恨みを持たれるのは勘弁願いたいんだが。

そんなこんなで自分たちも食事をしつつ、ドラゴンにも結構な量の食べ物を与えることが出来た。

「あー、食った食った」

「グアー……ケプツ」

「うわ、今ゲップしなかったか!? ああ、何て可愛さだ……」

昨夜盗賊にねじ込まれたパンから何も食べていなかった俺は、ドラゴン同様腹が減っていた。貴族にあるまじき暴食をしてしまったも仕方がないと思う。ただ、向こうの厚意に甘えすぎかもしれない。すみません、ついでの分際で……」

お茶を淹れてくれるばあさんに頭を下げ、俺とドラゴンの分の支払いを考えながら財布を探った。

「気にしなさんな。どうやらもう友達と言ってもよさそうだしね、アンタにだけ払わせたら、こっちの人も気持ち良く食事できないだろう? ここは諦めておくれよ」

「どうも、ありがとうございます」

「僕からお礼を。ありがとう、おばあさん」

二人で頭を下げるとばあさんは顔をしかめた。

「やめとくれ。お礼を言うのはこっちなんだからね。じゃあ、好きなだけゆつくりしていつて」

気風のいいばあさんは逃げるように奥に引っ込んでいった。何となく見送ってから、カップを持ち上げる。

「あそこまで言われちゃあ、もう何も言えないよなあ……」

「ふふ、ここはお言葉に甘えよう。コラ、逃げるな」

「グアッ!」

ルースはドラゴンを抱き上げていた。思いつきり嫌がられるのを何とか宥めすかしている。微笑ましいと言えないこともない。どうにか逃げようと体をくねらせるドラゴンに注目しながら彼が言った。「そつえば。君は、僕とは違って、どこか目的地へ向かって旅をしているんだろう?」

「ああ。フツ―は、旅には目的地があるもんだ」

「最終的な目的地はどこなんだ？」

こちらの皮肉にも気付かずさりと返してくるルース。そういえば言ってなかったか。

「この国から見ると、北に隣接するユミル学院だ。その学院生になる為に、な」

「ほう。アレイド・アークや彼の弟子たちで有名な、あの……」

ユミル学院。創立から三百年ちよつと経っている由緒正しい戦力育成機関だ。戦士から魔法使いまであらゆる分野に対応できる教師が多数雇われており、海や山、広大な森などを含む多種多様な土地には魔物が多く、実戦にも事欠かない。大抵十五、六歳で入学、約五、六年で卒業するころには立派な戦士や魔法使いになっており、国に帰れば軍の幹部候補生として歓迎される。

元々は、周辺の国々がたまたま平和な時期に、友好の証として、それぞれの土地や人材を提供し合って、若者の育成をより良いものにしようと始められたらしい。この国――ルークセントも設立に協力した一国だった筈だ。

ちなみにアレイド・アークは二百年ほど前のとんでもなく有名な大英雄で、彼やその四人の弟子たちはユミル学院の出身だったと言われている。

「しかし、平民上がりの兵士でもないのに、何で一人旅などをしているんだ？ 普通なら従者を伴って馬に乗って、といったところだと思っただが……」

「父親の反対を押し切った形で、ユミルに入るんでね。援助は一切ナシってことになったのさ。自分のヘソクリと母親が出してくれた金で装備を整えたら、従者にまで回らなかったんだ」

言う必要はないと判断して言わなかったが、元々父上とは折り合いが悪かった。その上、俺が軍を目指すなどと言い出すとは、何代

も前から文官として地位を築いてきた血と家を大事にする父上には、我慢ならないことだっただろう。これぐらいの嫌がらせは覚悟の上だった。

しかし、何とか用意した馬を失うとは思っていなかった。盗賊に捕らわれる前、預けておいたあの馬は今頃どうなっているだろう。

「……………そうか。どこもかしこも、なかなか儘ならないものだな……………」

「……………ま、俺には合ってるよ。おい、いい加減ドラゴン放してやれ。どうみてもストレス溜まってる」

テーブル越しにドラゴンの首を掴んで、俺のフードに非難させる。ルースの言い回しには引かかるものを感じたが、俺にはそこまですぐに深入りするつもりも権利もない。彼自身に対しては親しみや恩義を感じていても、俺に出来ることなどたかが知れているし、短ければ今日明日で別れる関係でしかない。

「クウー」

そんな自分への後ろめたさを誤魔化す意味合いもあって、ドラゴンに話を持っていったんだが、結果としてはそれが良かったかもしれない。

この小さな魔物は明らかにほっとした様子で、俺のフードの中で力を抜いた。見た目の可愛らしさについて忘れがちになっても、コイツはあの熱線を吐き出すことが出来るかもしれない魔物だ。暴走しかなない状況からは出来るだけ遠ざけた方がいい。

「ぬううう、この敗北感はどこへぶつけば！」

「構いすぎると嫌がるってこともあるんだって。生まれてまだ丸一日も経ってないんだぞ。我慢を覚えるのは、さすがにもうちちょっと後だろ」

「グア」

「くそう、息までぴったり合わせてっ！ 見せつけてるのか君たちはっ！？」

等と、グダグダ話しているうちに客が増え始めた。そろそろ昼に

なるのだろう。食事も終わったし、これ以上居座るのも悪い。

「そろそろ出ようぜ」

「む、そうだな」

料理屋を出ようと俺たちは腰を浮かせた。その時――。

「――憲兵隊だ！ 二人連れの旅人を探している！」

「全員顔を良く見せなさいっ」

乱暴にドアが開いて、二人の憲兵が堂々たる声と態度で踏み込んできた。

腰を浮かせたままのルースと俺は思わず顔を見合わせた。

「――あれは」

「ああ、俺たちに用があるんだろうな……」

料理屋の客たちは手を止めて、ドアに顔を向けていた。さっきまでの健全なざわめきは跡形もなくなり、嫌な緊張感が充満していく。場の空気が悪くなる前に、俺は憲兵たちの前に進み出た。

「ひょっとして我々にご用ですか？」

「もう一人は――、ああ、そこにいたか。大剣背負った美形に、身なりのいい平凡な男……」

「彼らのようですね。そう、隊長があなた方をお呼びです」

片方はガタイが良く鎧から見える腕がムツキムキ、もう一人はガリガリで剣とは別に短い杖を腰に差している。二人とも俺やルースより二、三歳年上だろうか。詰め所では見なかった顔だ。

「我らと共に来ていただくことになります。会計を済ませて出てくるように」

「逃げ出そうとか思うんじゃないぞ」

憲兵二人は言うだけ言っ出ていく。態度はでかいが、まあ、どんな街でも憲兵なんてこんなもんだ。緊張が解けた客たちが口々に話し出し、料理屋は元の喧騒を取り戻した。

「ちよつとアンタたち大丈夫かい？ 最近の憲兵隊ときたら、イザとなったら何の役にも立ちやしないってのに態度だけデカくて――」

「あんな口だけの連中、束になってかかってこようが平気だ」

心配して駆け寄ってくるばあさんに、涼しい表情で頷くルース。チラチラこちらを窺っていた給仕の娘が顔を真つ赤にして溜息をついていた。実際、昨夜も今日も大人数を一人で相手にして傷一つ負っていないのだから、まさに彼は口だけではないのだ。

「いや、悪いことしてるわけでもないです。事務的なものでしょう。手早く終わらせるに限ります。ごちそうさまでした」

「美味しい食事をありがとう、おばあさん」

お礼を言って店を出ると、二人の憲兵が偉そうに待っていた。ムキムキが顎で大通りを指し示し、勝手に歩き出す。

「……一つ、言うておくことがある。さっきはばあさんの手前ああ言っただが、どうにもキナ臭い」

憲兵たちから少し距離をとってついていく道すがら、俺はギリギリ届くぐらいの小声でルースに言った。

「何がだ？」

「後で来てくれ、ぐらいだったのが、わざわざ探し出してまで呼び出すっていうのがな。しかもあの仕事出来なさそうな隊長が、だぞ。もしかしたら何か面倒なことがあるかもしれない」

「ふむ。確かにな。わかった、覚悟だけはしておこう」

ルースは小声で頷いた。頼もしすぎる。

わざわざ俺が注意を促す必要はないのかもしれないが、心の準備一つで変わってくることもあるかもしれない。

詰め所の前には二頭立ての馬車がとまっていた。黒い車体は実用性と、見た目の豪華さがなかなかのバランスで両立された、品のいいものだった。今のところ御者台には誰も乗っていない。

二人の憲兵に促されて詰め所に入ると、隊長がどっしり座ったまま顔を上げた。

「ああ、やっと来たか」

俺たちがいない間に精神を立て直したのか、不遜な態度が復活している。

「先ほど、盗賊たちのアジトが壊滅しているのを確認した。盗賊どもの死体やオルトロスの残骸らしきものがあつたという報告も受けている」

隊長が向かっているテーブルには鳥かごが置かれ、一羽の鳩がじつとこちらを見ていた。この詰め所に帰るよう育てられた伝書鳩か。一方、ルースは無表情を装っているが鼻の頭がピクピクしていた。正しいのは自分だったと叫びたいのを我慢しているに違いない。

小さな紙切れを広げ、隊長は悪びれもせず続けた。

「もちろん財宝の確保も完了している。さて――、何か我々に報告をし忘れた事柄はないかね？」

「ありません。あ、昨夜アジトからここへ来るために、馬を二頭借りましたね。門番に預けてあります」

考えをまとめるフリをしつつ、答える。

思い当たる節はドラゴンの子供ぐらいだが……。憲兵がそのあたりの情報を持つてはいないだろう。

「……よからう。最後に一つ。我々は今回の襲撃と盗賊団の壊滅に關して、直接本部へ報告をしに行くことになったのだ」

「はあ」

思わず生返事をしてしまった時には、嫌な予感確信に変わっていた。

「お前たちにも証人として、王都までついてきてもらいたい」

4 ．少し早い昼食（後書き）

初稿 9 月 13 日

5・気まずい馬車

馬車は速足で整備された道を進んでいた。

ルークセントの道はまずまずといったところだ。たまに跳ねても、縛られて身動きがとれないような状況でなければ、尻が痛くなるようなことはない。

それでも、馬車の中の空気は重かった。

「このペースなら、王都までは二日と少し、というところか……」
隊長がぼつりと呟く。

馬車内には俺とルース、隊長とムキムキがそれぞれ隣同士で、向かい合わせに座っていた。さらに、ガリガリは一人御者台だ。

それにドラゴン俺のベストについたフードの中にいる。一切鳴き声も上げず、大して動かないのは、もしかや眠っているのだろうか。なるべく存在は隠したいし、そうなると思す場所もない馬車内で騒がれても堪らないので、非常に助かるのだが。

「……………」

ルースはルースで黙りこくったままだ。それほど狭くないとはいえ、大剣を背負ったままでは馬車の座席にはいられないので、やけに装飾的な鞘に入ったままの大剣を抱え込むようにして座っている。ムキムキは腕組みをした上で口を真一文字に結び、瞑想するように目を閉じている。

結果として、馬車内で発言するのは隊長のみ。誰も相槌一つ打たないであって、気まずい雰囲気は一向に晴れない。

俺は仕方なく口を開いた。

「……我々も同行することになった経緯を聞かせてもらえますか？」
「王都の憲兵本部からの命令だ。盗賊団壊滅の報告を行ったところ、

至急関係者を含めて直接来るように、との返答をもらった」

隊長はスラスラとそう言った。憲兵隊の詰め所には通常、通信用の共感水晶クリスタルが置いてある。かなりかさばるし、地脈の影響を受けやすいので、携帯して使うには不向きだが、速い情報のやり取りには欠かせない物だ。

「憲兵隊本部でもう一度報告をすることになるだろうな。それほど気負う必要はあるまいて」

嘘ではないだろうが、といったところか。だが、真実全てを話している訳でもないだろう。少なくとも額面通りに受け取ることには出来ない。

「我々に拒否権は……」

訪ねる俺に隊長は冷ややかな目を向ける。

「ないな。逃げたとしてもお尋ね者になることは避けられん。大体、聴取を避けなければならぬような理由があるのか？」

隊長はルースの実力を知っている。その上で釘を刺しているのだろう。俺は慌てて言った。

「いえ、ありません。しかし、一般市民というのは、国家権力には意味なく怯えるものですよ。それも本部となると余計です」

恭順を示しておく、隊長はにんまり笑った。

「気負う必要はないと言っただろう。我が憲兵隊は紳士の集まりだ」これは考えるまでもなく嘘だ。

ルースがピクリと反応した。どうやら俺と同意見らしい。

「こういった報告の為に王都に行かれることは、よくあるんですか？」

「私自身は年に何回か行くぞ。ルークセントでは憲兵隊に弓引くような愚か者はいない。心配は無用だ」

別にそういう意味で心配してるわけじゃないがなあ。

結局、車内の空気が良くなることもなく、気まずいまま半日が過ぎた。

「ここに泊まってもらうことになる」

日が沈む寸前、サートレイトから半日かかって、辿り着いたのは小さな村だった。

だが、二十戸あるかないか、というぐらいの村でも、普通の宿があるのがルークセント王国だ。

国営の宿が等間隔で点在するのだ。それほど豪華ではないとはいえ、貴族でも我慢が出来る程度には広く、清潔。ついでに値段も高い。

どこから出発しても宿の心配だけはない、というのがこの国のウリだった。

隊長一人、ガリガリとムキムキ、俺とルースでそれぞれ一部屋が割り当てられた。

宿の中でも従者や奉公人向けの部屋なのだろう、ベッドが二つに机が一つ、あとはランプが一つあるぐらいだった。

前日から続く寝不足と、ルースの行動に対する一喜一憂、ついでに馬車内の空気に疲れていた俺は、ほとんどベッドに倒れこむように眠りについた。

「さあ、朝だぞ！」

「ぐほあっ!？」

「グアン!？」

昨日の朝と同じ激痛を伴う起床を経て。

朝特有のやけに眩しい太陽の光を浴びながら、俺たちは宿を出発した。

相変わらず気まずい雰囲気の中、昼には小さな町で昼食、午後もずっと馬車の中だ。日の光が赤くなる頃、昨日よりは大きな村に辿り着いた。家々が寄り集まるように十数軒、少し離れて森を背負うように宿が立っている。

昨日泊まった宿よりは大きい、それでも泊まれる人数は30人前

後といったところだろうか。

「明日は早めに出発したい。日の出には起床、一時間以内に出発以上」

隊長はそれだけ言うと、自分が泊まる部屋に引っ込んだ。

「私たちも失礼します。余計な気など起こさぬよう……」

ガリガリがそう言い残し、隣に泊まる憲兵二人も、一礼して部屋に入った。食事も部屋で取るのだろう。

談話室兼食堂といった感じの広間に取り残された俺たちは、顔を見合わせた。

「俺らはここでメシにするか……」

「やれやれ。肩が凝ったな」

「グアー」

丸一日ともなると、馬車でただ揺られているだけでも、結構疲れるものだ。気まずい他人と一緒にでは尚更である。さつさと食事をとることにした。

丸いテーブルにつき、適当に注文をする。

料理を待つ間、暇そうにしていたルースが頼杖をついたまま言った。

「そう言えば……、腰の物についての説明をまだ聞いていないぞ、カインド」

「あ？」

「盗賊の一人が使ったほとんど動きなく黒魔法を打ち出したアイテムがあつただろう。一昨日の夜、後で説明してやると、君が言ったんだぞ」

確かにそんなことを言った気もする。

俺はホルスターから魔銃を抜き出してから口を開いた。

「アイテムじゃなくて武器な。黒魔法の紋章とか、精霊魔法の呪文を封印した魔弾を解放、発動させるってモンだ。名前は魔銃」

「魔力を通す？ 昨日の盗賊がく貫く枯れ葉を打った時には何も感じなかったんだが、その魔力はどこから来るんだ？」

「魔力は弾の後部に蓄えられてる。このサイズだとCクラス程度の魔術師が使う魔法とほぼ同じ威力だ」

俺は弾倉から魔弾を抜き取って、そのうちの一発をルースに渡した。

「38口径く貫く枯れ葉>弾だ。弾頭はく貫く枯れ葉>の呪紋が描かれた紙を粘土で封印してあって、鉄製の薬莢に魔薬として水晶の粉が入ってる。これはメイプラ製の弾丸だから水晶の粉が使われるけど、地域によっては魔力を有してる植物とか魔物の骨を魔薬として使ってる所もあるらしいぞ」

「……ふむ。これは……凄いな」

ルースは俺の言葉に反応出来ないくらい弾を見つめている。

少し大きな街ならいくらでも売ってるものなんだがなあ。

買い与えられた玩具に夢中になる子供のようなルースがおかしくて、少し笑ってしまった。

「む。笑うことはないだろう。初めて見る物なんだ」

「いや、悪かった。お詫びじゃないが、こっちも触ってみるか？」

機嫌を損ねたようなので、弾を抜いたままの魔銃を銃身を握って渡す。

「いいのかっ!？」

飛びついて来たルースの笑顔は、喜び一色で塗り潰されたような、本当に無邪気なものだった。

あれだけの実力にこれだけの容姿なのに、行動は素直で飾ることを知らない。変な奴だ。

「おおお……。ふむ、なるほど。この筒の——内側部分は魔力反射で……。持ち手辺りに力場のようなものが……。微かな魔力を発生させて、それを起爆剤として用いるのか……。ふむふむ、良く良く見れば確かに武器だ。余計な装飾がない代わりに、全ての動作を円滑にする為の配慮がある。分解しては——駄目だよな？」

「ああ……。駄目だ」

ちなみにこの銃は、技術国であるメイプラ、その中でも名工と名

高いジイさんの最新作だ。手入れはともかく、ヘタに分解などしたら、その辺の鍛冶屋には直せない。

「一度撃ってみるのは――」

「駄目だ」

「……そうか、残念だ」

途端にしょんぼりするルース。魔銃のグリップを握ったまま、俺に差し出してくる。弾が入っていないとはいえ、非常に怖い。

「一発とはいえ、そこそ値が張るんだ。一応、旅の途中だから無駄遣いは避けたい」

魔銃を受け取りつつ言った。というか、俺から言わせれば、自由自在に魔術を使えるルースの方がずっと羨ましい。

「それなら仕方がない。僕もどこかで手に入れるでしょう」

「グアツ」

ドラゴンが鳴き声を上げたので、辺りを見渡すと厨房から料理が出てくるところだった。

「今の今まで黙ってたのにな」

「フードから出した方が良くないか、カインド？ いや、是非テーブルで食事をさせてやるべきだ！」

料理は普通だった。昨夜の夕食、今日の昼食と印象がほとんど変わらない。サートレイトの料理屋の方がはるかに美味い。それでも量はあつたし、俺もルースもドラゴンも文句は言わずにしっかりと食べた。

食事を終えれば、特にやることもない。俺たちはさっさと部屋に引っ込んだ。用意された部屋も昨日と同じ。また同じ部屋に戻って来たか、と錯覚してしまうほどだ。

「……風呂に入りたいなあ」

鎧を脱ぎ、一応装備を点検している時にルースがぼやいた。

巨大な剣を鞘から抜きながら言うような台詞ではない。

「そりゃあ、無理難題ってところだろう」

「わかってる。思わず言ってしまったただけだ」

「サートレイトなら風呂屋ぐらいあっただろうけどな」

「……それを聞いたら、またあの隊長への怒りが沸いてきたぞ……隣のベッドから確かな圧力を感じる。これが——怒気？」

「忘れて、寝ろ。王都につけばさすがに入れるって」

「グアー」

「おお、慰めてくれるのか、可愛いなあ」

鼻を寄せて鳴き声を上げるドラゴンに、ルースの雰囲気が一変する。元々本気で怒っていた訳ではないだろうが、それでもこの変わり身の早さには感心することしきりだ。あと慰めるというよりは宥めているんだと思う。

横になれば、すぐさま眠気が襲ってくる。

ドラゴンを抱き上げようとするルースの猫撫で声と、それでもしつかり嫌がっているらしいドラゴンのむずがる声を聞きながら、俺は眠りについた。

「……ンド……、……きろ、カインド……」

自分の体を揺り動かされる驚きと、囁くようなルースの声で起きたのは何時間後の事だったか。二日連続で鳩尾に鉄拳を食らったこともあって、俺はわりとあっさり目を覚ました。

上半身を起こして、室内を見渡しても暗い。

「クア」

ドラゴンまで起きている。俺の懷から見上げるようにして俺の顔を覗き込んでいた。無意識に赤い毛でフサフサの頭を撫でつつ、重たい口を開いた。

「……何だよ、まだ夜じゃないふあ……」

「あまり音を立てるな。この宿は囲まれている」

「——ああ？」

「宿が囲まれていると言ったんだ。人数は五人ほどだが、獵犬かそ

れに近い生き物が十頭以上いる」

「!？」

俺の意識は一気に覚醒した。

この二日とちよつとでルースの性格と能力は大体把握している。

こんな冗談を言うような奴ではないし、盗賊のアジトで俺には聞き取れない音を正確に把握していた実績もある。

「気付いたのはどれくらい前だ？」

「つい、さっきだ。不穏な気配とでも言えはいかな、囁き声や極力たてないようにする足音などが耳に入った。おそらく……、そろそろ包囲が完了する」

そう言いつつルースは鎧を着始める。俺も慌てて、毛布の上ののせたままだったベストに袖を通し、鎧と剣帯に手を伸ばした。

「目的は……？」

「それこそ彼らに聞かないとわからないだろうな」

口元を歪めながら、ほとんど音を立てないで大剣を背負うルースの姿はとても様になっていた。俺の方も準備完了。最後にドラゴンをフードに押し込み、考えを纏める。

「包囲つてのが気になる。物取りならそんなことする必要ないだろ」

「感じとれる気配が暗殺者レベルだ、普通の物取りとは思えない——
——と完全に包囲されたな」

時間はないということか……。

「とりあえず、僕が出て行って相手をしよう。敵の目的が何であれ、向かってくる者がいれば出足は鈍る」

「それでいくしかないか。ルースが注意を引きつけている間に、俺は憲兵たちと宿にいる人間を起こす」

「なるべく多く相手をするつもりだが、全員を引きとめるのは難しいだろう。君は逃げに徹した方がいいぞ」

ルースはその端正な顔を心配そうに歪めて言った。

「俺一人ならともかく、憲兵たちがいれば、こっちの安全は何かなるだろ。お前こそヘマするなよ」

「グアー」

「ふふ。そうか、君もいたな。カインドを頼むぞ」

「グアッ」

ドラゴンの頭を一撫でして、ルースは大剣を抜き放つ。音もなく窓を開けると、するりと外へ出て行った。

「ふうー……っし、行くか」

俺も魔銃を抜き、慎重に部屋のドアを開けた。

右。左。ついでに上。臆病かもしれないが、ここまで確認してから廊下へ出る。

音を立てないように隣のガリガリとムキムキの部屋に。俺たちと同じ広さの部屋で二人は普通に寝息を立てていた。

「起きて、起きてください」

二人を同時に揺り動かす。

「……あア？」

「一体何だと言うんですか……」

とてつもなく不機嫌そうな声を上げながら起きるムキムキとガリガリ。それでも一応兵士らしく、突然の起床にもそれほどうろたえた様子はなかった。俺は人差し指を口の前で立てる。

「静かに。先ほど私の従者が奇妙な気配を感じ取りました。彼はすでに外へ出て、曲者の相手をしています。しかし、人数が多いらしく、全員を抑えるのは難しいかもしれません。彼が言うには、暗殺者のような気配が五人ほど、さらに猟犬のような気配が十頭以上いるとのこと」

具体的な内容に、すぐに二人の顔が真剣なものになる。

「逃げる為に嘘をついてる訳じゃねえよな」

俺を睨みつけるムキムキに、ガリガリが少し間を置いて言う。

「……こんな嘘をついても意味はないですよ。わざわざ我々を起すのならなおさらです」

「まずは隊長に報告か」

ムキムキは壁に立てかけてあつた剣を抜いて言った。すぐにも飛びだしそうだったので、慌てて口を開く。

「宿の主、それにもし他に宿泊客がいるならその人たちにも、伝えな」と

「なら、ウェイバーは隊長の所へ」

「おう」

ムキムキことウェイバーは鎧も着ずに部屋を出て行った。そういえば名前すら聞いていなかったんだな。

ていうかウェイバーで。

「貴方も、彼と一緒に隊長のところへ行ってください」

ガリガリは胸当てだけを着け、枕元にあつた指輪をいくつか指に嵌めた。

「いいえ、私も主のところへ向かいます」

俺は即答した。

こんなにバタバタしている中、ただじっとしているだけなんて嫌だ。

この状況なら、どうせどこにしようとも襲われるリスクは存在する。

それならより派手で、起伏に富んだ、後々話す時に面白い方を――

「貴方たちは本来護衛対象なんですがねえ」

ため息交じりの言葉に暴走しかかっていた思考から覚める。

「この状況なら、目と耳は一つでも多い方がいいでしょう？」

「それは説得力のある言葉ですね。よろしい……では、一緒に行きましょうか」

ガリガリがそつとドアを開け、俺もその後ろに続く。

当然のことながら灯りはつけられない。廊下はかすかに外の光が入ってくる程度で、充分に目が慣れている今でも、ぼんやりとした

輪郭しか確認出来なかった。

パキパキと音がする。

「——ッ!？」

驚いてそちらを見ると、ガリガリが指の関節を鳴らしていた。思わず囁いてしまう。

「この状況で何してんすか……」

「僕は白魔法が専門なのでね。指の動きは少しでも滑らかにしたいんですよ」

言葉で精霊に呼び掛ける精霊魔法、紋章で理を超える黒魔法に対して、形で奇跡を起こす魔法を白魔法と呼ぶ。手指で印を組み、それを何度か組み替えることで、魔法を打ち出すのだ。基本的に防御や敵の拘束など、補助的な魔法が多い。

この状況では少々心もとないがこればかりは仕方ないだろう。

それに、戦闘に関して素人で、唯一まともに使える武器といったら魔銃ぐらいの、この俺が最も心もとない存在である。

「緊張で気が立っていたもので……失礼しました」

「いえ……。援護をお願いしますよ」

曲がり角だ。ガリガリは片目以外を壁に隠すように、そつと角の向こうを確認し、一拍を置いて一気に踏み込んだ。

「ふう——……。オツケーのようですね」

一步一步足音を殺しながら進み、何度も何度も視線を動かし、怯えた鶏の様な動きで、ようやく宿の主の部屋と思しき場所まで辿り着いた。

「もし……、もし、主……」

ガリガリがドアを小さくノックし、小声で呼びかける。その間、俺は彼と背中合わせになって、周囲を警戒していた。

「ルークセント憲兵団、サートレイト隊所属、フィリップ・ゴウラです。火急の用件で参りました」

ガリガリが憲兵として名乗り、耳を澄ますが、返事はない。

思わず背中合わせで、顔を見合わせてしまう。暗闇の中、相手の

表情までは読み取れないはずなのに、俺にはガリガリの顔が引きつっているのが、見えた気がした。

「……い、行くしかないでしょうね……」

頑張れ憲兵。

廊下側に気配がないので、俺は少し距離をとり、魔銃を構える。

ガリガリがドアの取っ手に手をかけ、こちらを向く。互いに呼吸を計る。心臓が煩い。グリップを握る手が汗で湿っているのが今になつてわかる。一度銃を持ち替え、ズボンで手を拭いてから、今度はしっかりと握った。

「……………」

俺が頷くと、憲兵はドアを蹴破るように勢いよく開ける。

「ガアアアウウ!!」

咆哮とまったく同時に躍りかかる黒い影。

俺の体は反射的に魔銃の引き金を引いていた。

5・気まづい馬車（後書き）

9月14日初稿

6・未明の火柱

開いたドアから飛び出してきた影に、思わず発砲したことだけは自覚出来た。

「ギャン！」

影は、尻もちをついていたガリガリの体をかすめるように、石の廊下に倒れ伏した。

黒い大型犬のような外見。開いたままの赤い瞳。おそらくはヘルハウンドと呼ばれる魔犬だろう。やはり開いたままの口の奥には燻るような炎が見えた。しかし、それもすぐに消えていく。

横倒しになったその眉間には、俺が撃ったく貫く枯れ葉ハサー・デルーフによって穿たれた穴があった。

「——っ、っあ……」

声も出ないガリガリは座り込んだまま、動かない。

「……ハッ、ア、ふう〜」

俺もまた荒い息をつくしかない。今のは完全にたまたまだった。たまたま構えていた所にヘルハウンドが現れ、たまたま驚いた筋肉が勝手に動いただけだ。ついでに、たまたま転んだガリガリが射線上から外れていた、という幸運もあるだろう。

それでも、いつまでも幸運と成果に浸ってはいられない。

乾いた口を無理やり動かし、震える手でガリガリの腕をとる。

「しっかりしてくださいよ、ゴウラさん」

「……な、名前教えました……っけ」

「今さっき、ここで名乗ったでしょう？」

「そついえばそうですね。ハ、ハハ。腰が抜けてしまいました……」
自嘲的に笑うガリガリを立たせ、ほとんどお互い寄りかかるよう

にして部屋に入る。

部屋には月明かりが少し差し込んでいて、廊下よりも少しだけ明るかった。俺たちに宛がわれた部屋よりもやや広く、しっかりとした机や本棚などが並んでいて、生活感がある。

そしてベッドは上掛けが膨らんだまま。

「すみませ——」

主に声をかけようとして、気付く。

ガリガリが呼びかけても返事がなかったこと、部屋からヘルハウンドが飛び出してきたことからして、主の生存は絶望的だ。

しかし、上掛けが動いた。

「ぐ……むう……」

微かな月明かりの中良く目を凝らせば、恰幅のいい中年が猿轡を噛まされた状態で眠っている。

慌ててベッドに駆け寄った俺は、大声を出さないようにしていたのも忘れていた。

「おい！ だいじょ——」

呼びかける言葉を最後まで言う前に、視界の隅に動くモノ、そして銀色の光を見た、気がした。

次の瞬間には金属を打ち合わせるような音と仰け反る様な衝撃。

「フガウツ！！」

部屋の隅に潜んでいた何者かが、俺の右の首筋に向かってナイフを振り下ろした。だが、その刃を、フードから顔を出したドラゴンが、その小さな口と牙でしっかりと受け止めたのだ。

「——う」

ドラゴンの子がいなければ、その小さな口が届かない場所を狙われていたら、そもそもコイツが俺を守る気がなかったら。ほんの些細な違いで確実に俺は死んでいた。その恐怖と、意外にもまだ萎えない戦う気持ち。異なる感情が荒れ狂っていて、頭の中はもはや真

っ白だ。

「うっうううああっ！」

暴れ出しそうになる感情を押し殺しながら、襲撃者へ向かってほとんど当てずっぽうに魔銃を撃つ。一発、二発、三発、四発。

「ちい！」

襲撃者の舌打ちが聞こえた。転がるような動きで全てあっさり避けられる。この至近距離だと射撃能力ではなく、格闘能力の方がより重要なのだろう。俺は狩りはしたことがあっても本格的な戦闘訓練を受けたことはない。

だが、襲撃者は避ける為にナイフを手放していた。彼の得物はドラゴンがその口につちりと啜えたままだ。この状況で諦めるわけにはいかない。

少しでも距離を取ろうと床を蹴る。

その時、完全に忘れていたガリガリの声が響いた。

「——<拘束鎖錠>!!」
バインド・チェイン

俺の後方から、白い鎖が飛び出した。鎖はまるで生きているように襲撃者に巻き付き、その体を引き倒す。

うっ伏せになった男の顔が驚愕と屈辱に歪んでいるのが見えた。彼にとっても、ガリガリからの攻撃は予想外だったのだろう。暗殺者は当たり障りのない服装に平凡な髪型だった。街中で見かけても気にも留めないような普通さだ。しかしその目はあくまでも殺気を持ってこちらを見ていた。

ガリガリは両手に白く輝く鎖を握り締め、座り込みながらも必死に引き寄せている。

白魔法<拘束鎖錠>。バインド・チェイン 大ぶりの鎖を魔力によって編み上げ、対象を縛り上げる。それほど高位の術ではなく、込める魔力によって拘束力が上下する為に、術者の技量が如実に表れる。

「ぬううう！」

上半身を魔力の鎖に束縛された暗殺者がもがく。

「ぐうううう！」

ガリガリも汗だくで唸っていた。抵抗があればそれだけ消費される魔力が大きいのだろう。

敵はまだ諦めていない。味方は焦っている。それなら、俺に出来ることは――。

ダウン、と。

俺は残っていた最後の一発で、暗殺者の眉間にハサー・デルーア貫く枯れ葉>を撃ち込んだ。

「――」

ガリガリが呆けた顔でこちらを見る。いまだく拘束鎖錠>を消していないことから混乱していることがわかる。こういう時には命令してやった方が精神が立ち直りやすいだろう。俺は、震えだした指で何とか弾倉に魔弾を込め直しつつ、言った。

「まだいるかもしれませんが。特に廊下側を注意して、見ておいてくれますか」

衝撃と恐怖はまだ口にまで届いていないらしい。

何とか冷静に聞こえる声が出せたことにほっとする。

「――……あ、は、はいっ」

慌てて立ち上がり、ガリガリはドアへ向かう。

俺はベッドへ駆け寄った。

「大丈夫ですか!？」

「……むうう……」

宿の主は目を覚ましていた。体を小刻みに揺らす。良く見れば口の猿轡だけでなく、両腕を後ろ手に、足も揃えてしっかりと縛られている。ほどこうにも固すぎてほだけない。

「ゲ」

ドラゴンが肩口から顔を乗り出して、啜えたままのナイフを差し出してくる。ついさっき自分を殺しかけた刃物を受け取って、俺は言った。

「ああ、そりゃ刃物が一番だ、頭イイな。さっきのも含めて、ありがとう」

「グァー！」

暗殺者のナイフはやはり切れ味が良かった。猿轡も手足を拘束していた縄もあっさりと切れる。

「……あ、ありがとうございました……」

「事態はある程度理解しているんですね。ただ、お礼を言うのはまだ早いですよ。今日の宿泊客は？」

「サートレイトの憲兵様方だけ……です……。雇い人も、通いの者ばかり……なので……」

何度も頭を振るって、主は必死な様子だった。それでも、どもっている。

「わかりました。急いで隊長のところへ向かいましょう」

ベッドから下りる宿の主人に手を貸し、ガリガリの待つドアへ。

ガリガリは真剣な表情に戻っていた。ちらりと主を見ると囁く。

「怪我もないようで何より」

「……あ、はい。憲兵様のおかげです」

憔悴した様子の主人は少し反応が悪い。眠いのを無理して起きている子供のような――。

「何か薬品でも嗅がされましたか？」

「あ、ええと……。そんな気も……」

俺の質問に対しても、あまり明確な答えが返ってこない。自分の判断を口にした。

「これだけ前後不覚だと、我々の間に挟むようにして行かないと……」

「そうですね。先頭は――」

「先頭は私がいいでしょう。この場では私の魔銃が一番有効のようです」

ガリガリが何か言おうとするのを制して、自分の考えを押し通す。

「いや、それは」

ガリガリにはガリガリの憲兵としてのプライドもあるだろうが、はつきり言って、どっちが先でも大した違いはない。それなら、ドラゴンがすぐそばにいる俺の方が死角が少なくなるだろう。さっきのようなラッキーだって期待出来ないわけではない。

「次にご主人。しんがりに、えーと、ゴウラさん。何かあれば先ほどのように援護お願いしますね」

言うだけ言って、さっさとドアを出る。こういう時には、先に行動することで主導権を取ってしまうのが、一番手っ取り早い。

ヘルハウンドの死体を跨がないように廊下へ。それでも俺のブーツは、ぴちゃりと液体を踏んだ。ざわりと全身に鳥肌が立つ。

「……………」

魔銃を構えながら慎重に廊下を進んでいく。ガリガリはなかなか息が整わないし、宿の主人が何度もふらつき大きな音を立てる。怒鳴りつけたくなるのを押し殺して、空中に張られた縄を渡るようにほとんど摺り足で歩く。

さっきまでも緊張していたが、本当に襲撃されたことで、今の緊張は段違いだった。恐怖と興奮。すぐそこに暗殺者がいてもおかしくないような気がして、何度も確認してしまう。

助かったのは、視界にドラゴンの子供がいたことだ。俺の肩に前足を乗せ、キョロキョロと顔を動かして周りを警戒してくれている。はつきり言ってガリガリよりも頼もしい上に、愛嬌があって千切れそうな緊張感がほんの少し解れる効果もあった。

普段なら数分で済む距離を、どれぐらい時間をかけて移動したのか。隊長の部屋に辿り着いた頃には、俺は汗だくだった。

「ふう………」

大きく息を吐いたガリガリが小さくノックをする。俺はまだ警戒を解く気にはなれなかった。魔銃を構えたまま中からの返事を待つ。

ドアは普通に開いた。

「うおっ！ 何だ何だ！？」

出てきたムキムキは驚きの声を上げた。

ガリガリは飛び退いて白魔法の印を組もうと必死になっているし、俺は俺で魔銃をムキムキの額に向けて今にも撃ち出す姿勢だったのだ。

「襲撃されてるってのに……。何ですか、そのノンキな反応は」

「いや、それが」

ムキムキは歯切れが悪い。しかし、そんなこと知ったことじゃなかった。

「とにかく、中へ」

俺は全員を促した。どこから何が来るかわからない廊下より部屋の中の方がずっと安心出来る。

薄暗い程度の部屋は俺たちがいた所よりかなり広い。ベッドも大きく、寝椅子や低い机もあって豪華だ。机の上には空になった瓶が何本も――。

酒の臭いが鼻についた。さらに大きな鼾が耳に届く。

「貴方……まだ隊長起こしてなかったんですかっ！？」

「何度も呼びかけたんだが……。御覧の通りだ、すまん」

頭を抱えるガリガリと恐縮するムキムキの隣を過ぎ去り、俺はベッドまで歩み寄った。

大変幸せそうな顔で眠る隊長。縞模様の寝巻きに、ごく丁寧に三角のナイトキャップまでつけている。

「……んごあ、ぶふう……」

俺は強く握ったままだった魔銃をゆっくりと振り上げ――。

グリップの底を隊長の鳩尾に叩き込んだ。

「ぐもつつぱがはッ！」

隊長は跳ね起きた。確かにこの方法は効果的だ。

「おいおい」

「ま、仕方ありませんね」

ムキムキとガリガリがそれぞれ呟く。この反応が隊長の普段の行いを表している気がする。

「なっ、何事だっ!？」

「静かに。現在我々は襲撃を受けています。私の従者が外に出て大半を相手にしていますが、全員を抑える保証はありません。現に、この宿の主人の部屋には、暗殺者が潜んでいました。とにかく一か所に集まった方が危険が少ないという判断で、この部屋に集まったわけです。説明は以上です。よろしいですか？」

「う……うむ……」

俺の静かな怒りに怯んだのか、隊長はあっさり頷いた。もう少し何か言い出すかと思っていたので、普通にありがたい。よく考えたと起こさない方が良かった気もしてきたけれど。

ガリガリが隊長とムキムキに先ほどの戦闘を報告している間に、俺は窓にそっと近付いた。

「グウ……」

ドラゴンもフードから顔を出し、窓を覗き込もうとする。構われど嫌がる割に、ルースを心配する程度には仲間意識を持っていたようだ。

窓はガラスだったが、それほど透明度は高くない。顔をつけるようにして、外を確認しようとしたその時。

によっこりと、人影が現れた。

「うおわっ!!!？」

「——!？」

俺の大声に、室内が緊張に満たされる。俺はすでに魔銃を抜いていたし、隊長はベッドから転げ落ちた。

「僕だ」

たった一言でもすぐにわかる、高く、良く響く声。人影はルースだった。慌てて魔銃を降ろし、声をかける。

「脅かすなよ……」

「カインドツ！ 大丈夫か！？ 気配だけじゃ状況が掴めなくなってきた頃に、君の大声が聞こえたものだから——」

「何とか大丈夫だ。そっちの首尾は？」

「外にいた連中は全て片付けた。屋内に入ったのは、おそらく一人と——」

「一人と一匹は倒したぞ」

ルースの台詞から、外からの脅威はないと判断し、俺は窓を開いた。

巨大な剣を肩に担いだままのルースが、顔を突っ込むようにして近付けてくる。真剣な表情で、俺の足元から頭まで、何度も確認された。

「はああああ。無傷のようだな。奴らが思ったよりも強くて……、君をチヨロチヨロさせるんじゃないかなかったと後悔していたんだ」

「チヨロチヨロて」

ルースも見る限り無傷のようだ。

続いていた緊張がゆるみかけた瞬間、うつ伏せに倒れていた暗殺者と思しき人間が動いたのが見えた。手にはガラス玉のようなものを持ち、それをこちらに投げつけようと構えている。

「ルース、走れええ！」

叫ぶのと魔銃を構えるのを同時に。

俺の視線を読んだのか、まだ生きていた暗殺者にルースが弾かれたように走っていくのと、俺が<貫く枯れ葉>を撃つのも、同時だった。

さすがのルースも<貫く枯れ葉>より速くは走れないのか、暗殺者にとどめを刺したのは俺が撃った魔弾だ。しかし、それで終わり

にはならない。事切れた男の手から零れ落ちたガラス玉のようなモノは——魔法爆雷だ。例え衝撃がなくなとも、封印を解けば、任意の時間後に爆発させることが出来る。封印が解けているか否か確かめている余裕はない。

「そのガラス玉は卵が割れる程度の衝撃でも爆発する！ 壊さず、出来るだけ遠くへ！！」

「何て注文だ！」

ルースは大剣の切っ先を地面に突き刺し、魔法爆雷を地面の一部ごと持ち上げ、そのまま器用にそれを投げ飛ばした。

……真上に向かって。

「ここに落ちてくるだろうがボケえ——ッ！」

「あ。そうか」

ぼんやりと呟くルースに構っている暇はない。

慌てて窓から飛び出し、魔銃を白み始めた空に向かって構えた。俺は貴族の割に目がいい方だし、明るくなってきたのが幸いした。

朝日の光を反射しながら魔法爆雷が上がっていくのが微かに見える。

一発。外れた。二発。外れ。三発。当たらない。四発。ダメだ。

かなり高い位置とはいえ、落ちてくるのを確認。ほとんど祈りながら五発。距離が近くなればそれだけ難易度も下がるだろうが……。

もう一度引き金を引くも弾切れ。残弾数も忘れるほど焦っている。は、再装填だつてもたつく。

「僕も！」

いつの間にかすぐ隣にいたルースが叫び、一瞬で空中に紋章を描く。エリナス・テイルフ < 踊る枝葉 > だ。ハサー・テイルフ < 貫く枯れ葉 > を五発以上同時に発動させる上位術である。本来なら、タイミングや軌道を少しずつ変えた連続射出で相手を捉える術だが、ルースはそれを一気に上に向かって放った。

それでも魔法爆雷に当たっていない。

「ぬうう、くそうっ！」

珍しくルースが毒づいた。正確に狙いをつけるのが苦手なのだろうか。

俺も装填が終わった魔銃をもう一度空に向かって構える。もう一発撃ってダメなら避難を考えないと危ない。

「グアッ」

引き金を引こうとした時、ドラゴンがフードから俺の頭に移動した。前足が額辺りにかかり、腹の温かさが後頭部に感じられる。

「今忙しいんだ！ 遊んでる暇は——」

「グウウウラアアアアアアアアアアアアッ！！」

ドラゴンが鳴いた。

この小さな体のどこからこんな大きな声が出てくるんだっていうぐらいの大声だ。

その鳴き声に導かれるかのように、俺の頭上に、炎が渦巻く。魔法陣か、と思った瞬間、空気が弾けた。

炎の魔法陣から天に向かって、俺の腕ぐらいの太さがある赤い光が立ち上る。ほんの一瞬でどこまでも伸びていく、まるで水が地面から空に向かって落ちていくかのようなうだ。

「！！？」

爆発した、と確認した時には視界のほとんどが黒く染まる。次いで、衝撃。世界が揺れた。よろけて倒れ込みそうになる俺をルースが支えてくれた。

「これは——」

「黒魔法の上位防御術<断ち隔てる皿>だ。防御力は高いんだが…

…」

円盤状の黒い盾のようなものが俺たちの頭上を覆っている。直径は3m以上。普通なら至近距離で魔法爆雷が炸裂してもビクともしないだけの防御力があるのだろう。

しかし、頭上以外からの衝撃が思わずコケそうになるほど凄かったのだ。

「お前のおかげで助かったと言っべきだろうけど……。いくらなんでも威力強すぎじゃねえの？」

俺の頭から下り、肩に前足を置いて顔を覗き込んでくるドラゴンに愚痴る。

「グアゝっ」

「いや、この衝撃はあのアイテムのものだ。この子のアレは、おそらく烈火の柱>のような高温射撃魔法に近い。爆発するような特性は一切感じられなかった」

やや畏怖の混じる顔でルースは言った。ある程度以上の魔法使いは、見た目や結果だけでなく、気配だけでその魔術の特性や構成を見抜くことも出来るという。精霊魔法の<烈火の柱>に近いということなら、今のはドラゴンが精霊に呼びかけた、ということだろうか？

たっぷり一分ほど待ってルースは<断ち隔てる皿>^{エタラベス・ドレイス}を解除した。軽くため息をついて呟く。

「しかし……。あんな小さなアイテムでこれほどの爆発を起こせるものなのか？」

空にはまだ黒い煙というか粉塵というか、黒雲が大きすぎてまるですぐそこに漂っているかのようだった。

風が強く、木々は振り回されている。慌てて周りを見れば、宿の屋根は一部色が変わっている。瓦が吹き飛ばされたらしい。村の方でも、人々が家から出てくるのが見える。建物が倒れてしまうようなことはなくても、窓が割れたり、屋根が飛ばされたりしたのかもしれない。何より家畜が怯える気配が俺にも感じとれるほどだ。

「全く知らなかったから助かった。ごく至近距離だったらマズかったかもしれない」

「いや、俺の想定していた規模よりはるかに威力が強い……。防御魔法なんて必要ない、せいぜい軽い衝撃を感じる程度の影響で止めようとして、焦ってたんだ」

空を見上げたまま言う俺の肩を、ルースは何度も叩いた。

「それでも、結果的には助けられたさ。意外と度胸があるじゃないかっ」

何が嬉しいのか、声が弾んでいる。どうでもいいけど肩が痛い。「度胸というより暴走に近いと思うぞ。コイツが助けてくれなかったら一回は確実に死んでただろうからな」

俺は反対側の肩にいるドラゴンを親指で指し示した。

「グア」

「そうか。君も偉いぞ、ドラゴン君」

あまり俺の言葉を聞いていない様子で、ルースがドラゴンの頭を撫でる。子ドラゴンも今は大人しく身を任せている。

太陽が顔を出し始め、空は赤く染まっている。笑顔の美形と可愛いらしい小動物。まさに絵になる光景だった。

後ろには人間とヘルハウンドのゴロゴロ死体が転がっていたのだけれど。

「いやー、参りましたねコレは」

「俺にやあ状況がさっぱりわからん」

ガリガリとムキムキの声が響く。呆けたような表情で、窓から身を乗り出し、外を見上げていた。

俺たちは慌てて窓に駆け寄り、訪ねた。

「ここのご主人と隊長さんは？」

「主はまた寝入っています。外傷は見受けられないのでやはり薬品の類でしょうね。隊長は……」

「さっきの爆発でひっくり返って気絶しちゃったよ」

つ、使えねえ……。

思わずルースと顔を見合わせる。やっぱり起こす必要なかったな。
「ところで」

呆れ果てる俺たちに、ガリガリが気まずそうに切り出した。

「——その肩の魔物が何なのか、聞いてもいいですか？」

「「あ」」

俺とルースはもう一度お互いの顔を見る破目になってしまった。

6 未明の火柱（後書き）

9月16日初稿

7・お国柄談話

「——という訳ですね、このドラゴンの子は森で拾ったんですよ」
「ぐあー」

馬車の中、俺はドラゴンを拾った経緯を語り終えた。

卵から孵った場面や、オルトロス諸共盗賊たちをこんがり焼き尽くした熱線のあたりをばかした為、実際起こった事の半分ほどしか伝えていない。それでも嘘は最小限だ。

襲撃をやり過ぎた後、当然のことながら村は大騒ぎになったが、隊長が強引に出発を主張し、結局俺たちは王都への旅を再開していた。

そんなこんなで、昨日よりもやや早く出発した馬車の中、ドラゴンについて説明を求められたわけだ。

「龍種がそんなに人懐っこいなんて話は聞いたことがありませんねえ……」

ガリガリが呟く。今朝の襲撃以来、何となく気安くなっている。やはり同じ窮地を経験すれば互いに情も沸くというものだ。

そんなガリガリが橋渡しとなり、隊長やムキムキとも会話が成立したこともあって、車内の空気は昨日よりずっと穏やかだった。

「我が国でも、龍に乗れるのは極一部の騎士のみだ。それほど貴重で重要なもののだ。それをこんな若造が……」

隊長は、今朝の失態以来、不機嫌だった。しかも、部下たちにすら、それを取り合ってもらえていない。

拗ねたおっさんの皮肉を遮って、俺は言った。

「この魔獣騎兵で有名なルークセントでも、龍種は珍しいものなのですか？」

「当たり前だ。虎の子の飛竜部隊で十体、輸送にも使われる陸戦竜

でも十五体ほどと言われている」

「繁殖も難しいらしいんです。主力というほどのものでもありませんし、実際は名誉職に近いものですから、国民の目に触れることも極稀なんですよ。昔は、野生の目撃例———というか被害なんかも多かったですけどね。今ではさっぱりです」

「そうなんですか……」

ルークセントと言えば、飛竜部隊がすぐに思いつく外国人の俺には、ちよつと衝撃的な事実だ。アレイド・アークの冒険譚——飛竜部隊がアレイドたちに協力し、ヒト数人と飛竜が混成編隊飛行を行う場面——に目を輝かせたものだったのだが。

「私でも数年前の軍事パレードで初めて龍を見たんだぞ。それをその辺で拾ってきたのだと……」

また隊長がぶつくさ言い出した。ガリガリが苦笑しつつ口を開く。「崩御されたウッドウェイン王陛下最後の年の軍事パレードですね。私も見たかったなあ。あれ以降ないですよね」

早足で進む馬車の小窓から外を覗けば、広い平野が見渡せる。基本的に起伏の多い土地であるラチハークではあまりお目にかかれない光景だ。

春前で旅するには適した時期なので、すれ違う馬車も多い。

「ラチハークでは魔物を軍事力とすることを嫌がっていますから。そういつた軍事パレードがあつても、大型魔獣なんて見ることもありません」

ちらりと故郷の事を考えた所為か、思わずそんな言葉が出ていた。「ああ、ラチハークの出身だったか……。あそこはドワーフが多いと聞いたことがあるが」

そう言えば、俺とルースの名前だけしか教えてなかったか。まともな自己紹介をするような雰囲気じゃなかったからなあ。観察眼がある者なら、俺の鎧についている紋章で、国どころか地域まで一発

でわかるだろうが、隊長にそんな眼はなかったらしい。

「ラチハークの王族にはドワーフの血が流れていますからね。国ではヒト種といえば、人間とドワーフでした。といっても大きな街に下りてくるドワーフはそれほど多くないですよ」

「我がルークセントではドワーフはほとんど見ないな。一部付き合っているのがエルフとホビット。獣人は大昔多かったそうだが、今では外見だけでソレとわかる者は少なくなった」

「エルフですか……。見たことないなあ。綺麗なんでしょうねえ」

「アレは確かに美しいぞ。ただ全体的に細すぎる。私などはもっとこう凹凸があるほうが——」

隊長が瓢箪の形を両手で描く。はるか昔から、男同士の親睦を深めるのに下世話な話は欠かせないと決まっている。

俺たちが友情を深めようとソツチ系に話題を持っていこうとしたその時、怒号で馬車が震えた。

「——そんな話を、している場合かっ!!」

それまでずっと黙っていたルースだった。和み始めたばかりだった車内の空気が凍りつく。

「暗殺者は確実に我々を狙っていたんだぞ！ 相手の分析や対策ぐらいしたらどうだ!! 不安がる村人の訴えを、重要な任務があるからと耳を貸さず出発したのは、猥談をする為かっ!!」

ルースはとても滑舌がいいし、声もよく通る。しかも抑揚まであって、最後の締めにも最も声が大きくなるよう計算されているかのようだ。

確かに朝、村を出発する時からルースは不機嫌だった。隊長が愚痴を言うタイプならルースは黙るタイプらしい。ずっと抱えていた怒りが、俺たちの会話で爆発したのだろう。猥談というほどのものではなかったとは思うが、イライラした奴は小さなことでも別の大きな何かのように感じるものだ。

一頻り吠えたルースが息をついたのを逃さず、俺が弁解を試みた。
「確かに下世話な話をしすぎた。でもな、今朝のアレコレを気にしすぎるのもどうかと思うんだ。結果としては無傷で倒せたわけだし……」

「あんなの運が良かったただけだ！ この子がいなかったらあの村は半分吹き飛んでいたし、カインド、君はさらにもう一回死んでいたんだぞ！」

「グアーツ」

フードに納まっていたドラゴンまで攻めるように鳴き声を上げた。その辺の話題を避けていたのは事実だ。

俺としては助けを求めて、憲兵たちに視線を送るしかない。

「出発までに簡単な見分はしたが、目ぼしい成果はなかった。魔法爆雷は爆発した一つだけだったし、全員しつかり事切れていたのだから、残った所で、別の憲兵隊が到着するまで待っていることしか出来なかっただろう」

隊長が口を開き、ガリガリが続ける。

「それに、貴方たちを王都の本部へ連れて行くのが重要な任務なのは、嘘偽りのない真実ですよ。調査の為に足止めをされるより、早く王都に行って、そこで報告をした方が無駄が省かれます」

実質ルースは俺たち全員にとって命の恩人だ。憲兵たちも自然と態度が改まっている。

理屈の伴ったそこそこ真摯な態度の二人に、ルースの勢いは若干弱まった。

「はあ……。なら、出発については仕方なかったでしょう……。しかしだな、襲撃を受けたその日に、相手や状況に関して、話題にもしないのは兵士——いや、戦士としてどうなんだ？」

憲兵たちに対しても当たり前のようにタメ口を使うルース。俺などはハラハラしてしまうのだが、憲兵たちはわりと順応しているのか、その辺りを問題視していないようだった。

「そうは言っても、実際に戦ったのは貴方とカインドさんが主ですし……。接触があった私でも、連中が何者で何が目的だったのか、一切心当たりはありません」

ガリガリの言葉に、ルースは軽く顎に手を添え、思案の表情を浮かべる。そんな何気ない仕草が絵になる奴である。

「ならヘルハウンドだ。ほぼ完全に支配下に置かれていたし、数匹での連携も完璧だった。僕はあのような使役の仕方は聞いたことはない。この国では当たり前のことなのか？」

「一般的にはどうか知りませんが、軍では当たり前ですよ。突撃兵と一緒にヘルハウンドを敵陣に突っ込ませたり、隠れている敵兵をあぶり出したりするわけです」

ルースはガリガリの言った情報を整理しているのか反応しない。俺は自分の考えを言ってみた。

「ということは軍属から外されたはみ出し者が、ああいう仕事をしている可能性もあるわけですね」

ガリガリが渋い顔で答える。

「有り得ないとは言いつれない、ぐらいですかね……。魔獣使いとして必要な技術や魔法を軍で覚えたとしても、ヘルハウンド自体を用意する必要はあるわけですし」

「除隊の際に持ち出すのは重罪だしな」

隊長が相槌を打つ。

少しの沈黙の後、ルースが誰に言うともなく呟いた。

「……それでも、奴らの動きは連携が取れていた。一人一人はそれほど使い手ではなかったが、互いに補い合う形を崩さなかった。こちらとしても、出来るだけ多数を引き止めなければならなかったから、攻め手に欠けたんだ」

「お前も足止めされていたってことか？」

「悔しいが、そうなる。敵と僕とで利害が一致してしまった訳だ。今相手取っている者を逃がさない、という利害だ」

「そうなる……、奴らの目的はルース以外、になるのか？ 実際のところ、宿に侵入したのは暗殺者一人とヘルハウンド一匹だったから、そっちの方が片手間なのかと思つてたけど」

憲兵たちは俺たちの会話に聞き入っている。

「奇襲をしようとしていたところを僕が迎え撃つたんだ。向こうにしてみれば一人と一匹を侵入させるのが精一杯だった、と見るのが自然じゃないかな。逆に僕が標的だったとしたら、全員で向かつてくればいいわけだし」

「ふうむ……。そもそも、俺たちの誰が標的だろうと、殺すことが目的なら、あの魔法爆雷で一発吹っ飛ばすのが一番手っ取り早い筈だもんなあ」

「そつえば、その魔法爆雷？ それは簡単に手に入る物なのか？」
ルースの疑問に答えたのはガリガリだった。

「魔法爆雷自体は街で普通に売られてますよ。と言つても、あんな威力はありませんけど。一般で手に入る物だとCクラスの＜弾ける傘＞^{ツル}ぐらいの威力が限界です。それ以上となるとやはり裏社会が……軍関係になりますね」

黒魔法の＜弾ける傘＞^{ヘモベツトル}は爆裂系では中位にあたる。至近距離なら体がバラバラになるぐらい、近距離なら手足が飛ばされるぐらい、少し距離があると爆風で転がされるぐらいの威力だ。上手く使えば家一軒ぐらいなら壊せるかもしれないが、村全体を巻き込むような魔法では決していない。

やっぱりルークセントでも、あの威力は異常だったのか。魔道具の加工で言えばラチハークが最も技術が進んでいる。そんなラチハークで育った俺にもあの威力は完全に想定外だったのだ。その辺の暗殺者が持ち歩けるような品ではないと思つていた。

それぞれ考え込んでいるのか車内が静かになる。馬の蹄が立てる音と、軋む車輪の音。

俺は一つため息をついて、口を開いた。

「結局のところ、決め手に欠けるってのがわかったただけですね。現状では相手が誰なのか、まで行きつけません。目的が何なのか、さえはつきりとはわからないんですから」

「我がルークセントでは徒に憲兵に弓引くような輩はいない。となれば、目的はお前たちではないのか？」

他より多く憲兵がいるサートレイトみたいな大きな街でも、襲撃を受けてましたけどね。

俺は皮肉を呑み込んで、隊長に言った。

「私はただの兵士見習いで、旅の身の上ですよ。考えられるとすれば、この従者が先日滅ぼした盗賊団あたりですが……」

「恨みか……。しかしあの盗賊団は完膚無きまでに叩き潰されて、その上我が隊で調査にも乗り込んだんだぞ。仮に生き残りがいたとしても、逃げ回るのに必死でお前たちの動向を探るどころでもないだろう」

「それに付け加えると、この従者の強さを目の当たりにしたら、あの程度の戦力でどうこう出来るなんて思いませんよね。残りの我々とはともかく」

ルースを見れば得意げに胸を張っていやがる。

ガリガリが片手を上げた。

「あと可能性がありそうなのは……そのドラゴンの子供ですかねえ」「グア？」

俺の肩に前足を乗せたドラゴンが軽く首をかしげた。

龍種が珍しいものだとするば、それも有り得るか。ほとんどフリードの中で動かないとはいえ、食事の時にはテーブルに出ている。たまたまそれを見た者が良からぬことを考えても不思議はない。

或いは、盗賊団に卵があり、それがすでにアジトにないことを知る人物が、繋がりを辿って行って——これはちよつと苦しいか。

それでもルースへの恨みよりはしつくり来るような。

「——何にせよ、暗殺者共は全滅。今日にも王都に着く。もう襲わ

れるような心配はあるまい」

もはや議論に飽きたのか、隊長がまとめらしきものを言い放った。

そう言われると、荒事ばかり続いた所為で気が立っているだけ、とも思えてくる。隊長が言ったように憲兵相手に襲撃をかけるような輩はそうはいないだろう。明確な答えが出ないアレコレを考えて唸っているよりも、まずは——そう、さっさと王都へ向かい、報告を澄ませ、風呂でも浴びる。ルースとはそれでお別れだろう。ドラゴンのことはそれから考えて、ユミル学院への旅を再開しなければならぬ。

ぼんやりとそんなことを思案していると、フードの中身が突然暴れ出した。

「グアーツ！」

「な、何だっ!？」

思わず身を振って叫んでしまう俺。

「クツ。どうした、カイ——」

笑いをこらえた様子でこちらを見たルースが、途中で言葉を切った。いつの間にか真剣な表情になって、辺りを見回す。

「——速度を上げるッ!！」

「はい？」

ガリガリは何も飲み込めていないのか、呆けた表情で呟いた。おそらく俺と隊長も同じ顔をしているだろう。

「そうそう有り得ない筈の! 襲撃だッ!！」

ルースが高らかにそう言い放った瞬間、窓の外が赤く染まった。

爆音と衝撃。

俺は堪え切れずにルースに倒れ込んでしまう。華奢な割に柔らかい。アレか、使う為に鍛え上げられた筋肉は乙女の柔肌のように柔

らかい、とかいうアレか。

「——っ！ さ、さつさと、退く！」

一瞬ぼんやりしていると、ルースに押し退けられ、何とか身体を支えるという情けない格好になった。

「な、ななな！」

「何事ですかっ！」

憲兵たちも必死に自分の体を支えながら叫んでいた。

御者台と車内に挟まれた窓からムキムキが顔を出す。

「無事か！？ 何かの魔法による爆発らしい！」

「爆発ぐらいは予想がつかます！ 攻撃ですかっ！？」

「はつきり言つてわからん！」

憲兵たちも混乱しているのか要領を得ない。

「とにかく速度を上げる！ 隊長っ、悪いがこの馬車、穴を開けるぞ！」

脇の下から赤い短刀を抜き放ったルースは、それを天井に向かって振るった。一瞬のうちに、人が一人、楽に通り抜けられる綺麗な円形の穴が出来上がる。

「隊の備品があ！」

「それどころじゃないっ！」

隊長の嘆きを一蹴し、ルースは自分で開けた穴から屋根へ飛び出した。

「——二発目、来るぞっ！！」

さつきよりもでかい——いや、近い衝撃。扉の窓に使われていたガラスが砕け散る。

「いやあああああああああ！！」

隊長の甲高い悲鳴がウザくて、自分で悲鳴を上げる暇がなかった。割れたガラスの破片が車内に飛び散った。怖い。心の底から怖い。それでも状況を知りたくて、ルースが開けた穴から顔だけを出した。

馬車の後方に立ち上る砂塵がまず見えた。そして、何頭もの馬とそれに乗る武装した男たちが小さく確認出来る。距離はまだ1 km ぐらいあるだろうか。

「頭を引っ込めろっ、カインド!!」

屋根にしゃがみ込んでいたルースが強引に俺の頭を押し込む。すぐに爆音が響いた。しかし音は大きかったが衝撃はそれほどでもない。

車内で首を竦めている俺に、ガリガリが詰め寄ってくる。

「何なんですか、これはっ?」

「ルースの言う通り、賊の襲撃に間違いありません」

「何故だっ!? おかしいぞこんなことは!!」

隊長の嘆きを無視し、もう一度穴から顔を出す。

「この爆発はアイツらの魔法攻撃なのか?」

「いや、どうやら上空にもいるようだな。あのアイテム——魔法爆雷と言ったか、あれらしい。小さい上に透明だからかなり近くまで落ちてこないと確認出来ないんだ」

空を見上げると、影が二つ見える。距離がありそうなのに小さいということ、巨大な何かが上空にいるということだろう。

「……魔法で防ぐことは?」

「僕が防御に専念しているうちに、アレが追い付くぞ」

後方から迫ってくる集団のことか。確かに先ほどより距離が縮まっていた。俺たちの乗る馬車も相当な速度になっているが、向こうはおそらく馬一頭に一人、こちらは馬二頭で五人プラス馬車そのものの重さまである。そのうち追い付かれるのは火を見るより明らかだ。

「それなら……、お前は先に空の方を排除した方がいいな。出来るか?」

「楽勝だ、僕一人なら。でも、君たちを守るのは難し——また来たっ! 今度は後ろからだ!」

ルースの腕が霞み、一瞬にして空中に紋章が描かれる。 <立ち隔

・ドレイス

エタラベス

てる皿>だった。後ろから馬車を隠すように、黒い円盤状の魔力障壁が現れる。今度は音も衝撃もなかった。矢や魔弾での攻撃だったらしいが、全て<立ち隔てる皿>が防いだのだろう。

「……っ！」

しかし、一本の矢が障壁の上を超えて、俺の顔のすぐ横に突き立った。全身に鳥肌。うん、これは、最低一人は腕のいい射手がいるってことだな。

内心の動揺を表に出さないよう、俺は口を開いた。

「や、やっぱり空の方を早く何とかするべきだ。馬か馬車にイイのをもらったら逃げることも出来なくなるだろうし。後ろから来るってことは爆発系の攻撃はしづらいだろ」

何とか普段通りの口調で言った提案に、ルースは不安そうな顔を見せた。

「……本当に大丈夫か？」

「魔銃で牽制すれば何とかなる、かもな。心配なら、焦らない程度に急いで、空のをやつつけてくれ」

無理やり口の端を持ち上げて笑う。ルースは一瞬顔をしかめたが、馬車の上で大剣を抜き放った。空いた左手ではすでに複雑な紋章を描いていた。

バモベクナッド

「一発く舞い散る毬栗>を放ったら、空の敵に向かう。上空からの攻撃は完璧に阻止してみせるけど、あまり無茶はするなよ、カインド！」

「了解、頼んだ！」

「ぐあー！」

俺とドラゴンの激励に、ルースはにっこりと輝くような笑みを返した。

こんな状況でなければ絵師に頼んで絵画にしてもらいたいほどの笑顔だった。

「行くぞー!!」

ルースがく舞い散る毬栗^{バモベクナツド}を後ろの集団へ投げつけ、馬車の屋根を蹴る。

それと同時に、俺は頭を引っ込めた。

7 お国柄談話（後書き）

9月19日初稿

8・逃げ戦、空戦

青ざめた顔をしている隊長とガリガリ、そして御者台にいるムキムキへ伝える為に、俺は大声で言った。

「敵は上空と後方にいます！ 爆発は空からの物でしたが、こっちはルースが抑えるので、これ以上はないと思っていいでしょう。ウェイバーさんはなるべく速く馬車を走らせることに集中して下さい！」

「言われなくてもそれぐらいしか出来ねエよッ！」

ムキムキが言い終わるか終わらないかで爆音が響いた。衝撃はほとんどないのでルースの置き土産だろう。気にはしてられない。

ガリガリの肩に両手を置いて、力を込めた。

「問題は後ろから迫ってくる集団です。弓矢はもちろん、魔法だか魔弾だかまで撃つて来る。我々に倒せるとは思えませんから、ルースが空の敵を倒して戻ってくるまで時間を稼ぎましょう！ 白魔法使いなら、防御魔法は得意ですよネ？」

「あ……は、はい……」

ほとんど放心状態のガリガリは生返事が精一杯のようだ。

震える手で、縋り付く様に剣を握り締めている隊長が口から泡を飛ばした。

「ど……どどど、どこかに逃げ込めんのかッ!？」

「外見て言っして下さいよ！ どこに馬車隠すようなところがあるんですかッ」

馬車が走っているのは草原で、木立があっても道から外れ過ぎている。

「な、なら戦うべきだ！ 馬車を止め、剣を抜き、我らが武勇を世に問うのだ！！」

「俺らじゃ秒殺だ、ボケエツー！」

「グガー！」

的外れな隊長の提案に思わず俺とドラゴンの口調は荒くなった。諦めに基づく玉碎など冗談ではない。驚いて黙った隊長に畳み掛けてしまう。

「それとも何か、隊長サン一人でアイツら全員と戦ってくれるのか？ 倒してくれるのか？ 勝てないまでも足止め出来んのかッ！？」

隊長が目をまん丸にしたまま首を横に振り続ける。

さらに迫い討ちをかけるべく顔を近付けようとした俺を、ガリガリが止めた。

「落ち着いてくださいカインドさん。防御魔法で馬車を守りながら逃げる訳ですね？」

俺と隊長のダメっぷりを見て、自分がしっかりしないといけないとでも思ったのか、ガリガリの目には知性の光が戻っていた。こういう戦意の上げ方もあるのかもしれない。

俺はガリガリに向き直り、その細い目を真っ直ぐに見据えて言った。

「……失礼しました……。——そう、逃げ切るのが目的ではなく、時間を稼ぐわけです。ルースが戻ってくるまでなら何とか出来ませんか？」

「……ルースさん次第ですか……。でも、これ以上の案はないでしょうね。やるだけやってみましょう」

ガリガリが緊張した表情ながら、しっかりと頷いた。

言われるまでもなく、俺の案はルース次第、いや、ルース頼りだ。自分も含めた上で、アイツ以外に敵を倒せるだけの戦士がいらないのだから、当然ではある。

だが、そんな戦力や駒として以上に、俺はいつの間にか、ルースを絶対的に信用し始めていた。

ルースは視界の端で、<舞い散る毬栗>^{バモベクナッド}の爆発と、その為に急停止せざるを得なかった盗賊たちを確認した。

馬車を蹴って飛び出した勢いがあるうちに左手で<空駆ける矢>^{トギルフ・タサフ}を描き、上空100mほどで羽ばたいている鳥に向かって行く。

鳥はおそらく、サンダーバード。雷色の羽を持つ巨大な鷲だ。体長は3mほど、翼を広げると15mを超えることもある。

そして、その背にはヒトが乗っていた。鞍らしき物まで備え付けていることから、先日のオルトロス同様、魔獣使いによる襲撃なのだろう。

——ヒトが一人乗っていたところで大した違いはない。一交錯で一体ずつ、出来るだけ早く、殺す。

手前に位置するサンダーバードの首に狙いを絞り、最大限魔力を込めたく空駆ける矢>の勢いをそのままぶつけるつもりで大剣を引き絞る。

「ハアッ！」

気合声と共に振るわれた黒い大剣は、敵に届く前に弾かれた。鉄と鉄をぶつけたような音が響く。

「——ッ!？」

「ただの魔物と一緒にされるなあ、舐められたもんだぜ！」

サンダーバードの背に乗った男が笑いながら叫んだ。右手を前に突き出している。その掌から50cmほどのところに、半透明の塊が淡く光っていた。一辺1mほどでダイヤ状の板のような形をしている。

白魔法<菱形鉄壁>だ。使用魔力の割りに堅く、扱いやすい防御魔術。その魔力の盾は、一度発動させれば、掌の向きや腕の動きで好きなように移動させることが出来る。

突撃の勢いを完全に殺されたルースは、一瞬身動きが取れなくなつた。黒魔法の飛行術は馬力が少ない。

サンダーバードが羽ばたいた。距離を取るように、後方へ移動する。

「――！」

考えるより先にルースの体が動いた。大剣を弾かれて流れた体勢を利用して、そこから体を捻る。上下反転しつつ、目線は上空へ。すぐそこに、もう一匹のサンダーバードが飛び込んでくるのが見える。こちらの乗り手は滑稽なほど長い槍を持っていた。

「くっ！」

ルースはさらに体を捻り、手足を畳んだ。

ブーツの端を穂先がcaする。風切り音と共にサンダーバードがすぐそこを通り過ぎていく。

今ならやれるか。

ルースは呪紋を描き、槍を持った敵の背中に狙いを絞る。精神集中の為、術名を叫んだ。

ウォールド・テルプ

「<打ち抜く煉瓦>ッ！」

黒い雷が轟音と共に奔つた。

ルースの声で気付いたらしく、こちらを見て驚愕の表情を浮かべるサンダーバードの乗り手。この距離とタイミングで避けることは出来ない――筈だつた。

魔力弾の射線上に飛び込んでくる影。そしてガラスが割れるような破砕音。

「――ッ！？」

ウォールド・テルプ

ルースの<打ち抜く煉瓦>は再度、<菱形鉄壁>に防がれていた。

ダイヤ・アイロン

『槍持ち』を『盾』が守った形だ。

しかし、向こうも損失がなかった訳ではない。

「一撃で砕けるとかありえねーよッ!? 何だコイツ!」

二十代前半と思しき乗り手が大声で嘆く。

例えば＜菱形鉄壁＞が優秀な防御魔術で、使い手が常に魔力を補充できる状況であるうとも、防ぎきれる限界は存在する。ルースの＜打ち抜く煉瓦＞とそこに込められた魔力量が、敵の＜菱形鉄壁＞を砕いたのだ。

ルースは端正な顔を顰めた。

——やりづらい。

敵は得意分野を活かし互いを助け合うことで、攻め込まれる隙を減らす戦法だ。元々多対一に慣れていないルースにはどこから崩しているものかわからない。しかも、観察や対策に時間をかけられない状況である。

脅威だとは思わないが、やりづらい。未明の襲撃でも痛感したことであった。

馬車の速度は相当なものになっている。普段の俺なら、頼むからもっとゆっくり、と泣いて頼むような速さだ。しかし、明らかな敵意意を持って集団が追いかけてくる状況では、そうもいかない。

「もっとスピード出ないんですかッ!」

御者台に向かって叫ぶと、ムキムキがより大きな声で怒鳴り返してきた。

「ムチャ言っなッ!! これまで事故ってねえのが奇跡なんだよッ

「!!」

ルークセントの道がいくら整備されていると言っても、延々と平らな道が続いている訳ではない。その上、馬で走り抜けるには何の問題もないような段差や、避ければ済む小石が、二頭立ての馬車には致命的になり得るのだ。

ムキムキの言ったことの方が正論である。

「グアッ」

突然、ドラゴンの子供が鳴いた。

そして、ダン、と叩きつけるような音が響く。

「!!」

車中に嫌な沈黙が下りる。

天井に空いた穴から、俺は恐る恐る頭を出した。

馬車後部の板に、矢が突き刺さり、びいんと震えているのが見えた。

さらに視線を後ろに移動させると、小さく見える十五人ほどの騎馬集団。ルースのく舞い散る毬栗バモベクナッドで一旦離れた襲撃者との距離は、もうほぼ取り返されていた。

攻撃が再開される。

「ガリガ——……ゴウラさん、お願いします!」

「今変なコト言いかけてませんでした? まあ、いいですけど」

馬車内で座ったままのガリガリが、両手を様々な形に組み替える。後方に向かって両腕を伸ばし、術名を口にした。

「行きます、く大円硝子サイクル・ガラスグッ!」

馬車の後ろギリギリに円形の防御結界が形成された。直径は3m弱といったところか。ルースが使ったく断ち隔てる皿エトラベス・ドレイスとは違い、ほぼ透明で、こちらからも向こうからも相手が見える。

「この術はそれほど防御力は高くありません! ただの矢なら十数本同時に当たっても大丈夫ですが、魔法だとヘタをすれば一発で碎

けます！ マズそんな時の警告や、砕けた時のフォローをお願いしますよ！」

話を聞いているだけで不安が増してくるが、魔法を使うのはガリガリだ。彼の判断を信じるしかない。

白魔法は、衝撃を受けると劣化していき、限界を超えると砕ける。劣化は魔力を補充することで完全な状態に戻るのだが、強力な術ほど当然補充にも魔力をたくさん必要とするらしい。数発防いでガリガリの魔力が尽きました、では笑い話にもならない。

防げる範囲と盾としての堅さ、術のランクと使用魔力量のバランス、いつまでどれぐらい続くかわからない戦闘、そして後方の確認のしやすさ等を踏まえた上で、サイクル・グラス＜大円硝子＞を選んだのだ。

「グアー！」

もはや攻撃警報装置となっているドラゴンの子供が鳴き声を上げ、サイクル・グラス＜大円硝子＞に三本の矢が突き刺さった。

「来ました！ これぐらいなら大丈夫ですよね！？」

「ええ、魔法に注意して下さい！」

車内のガリガリが緊張した表情で答えた。ちなみに隊長は頭を抱えて座り込んでいる。

敵との距離は300m程度だろうか。

土煙を上げて追いかけて来る集団から一頭の馬が飛び出した。見るからに魔法使い然としたローブ姿の男が乗っている。突き出した片手のすぐ前に、大人の頭ほどの炎の塊が見える。

「魔法です！ 多分、＜火炎の球＞！」

数条の矢と共に発射された＜火炎の球＞は、矢よりは数秒遅れてサイクル・グラス＜大円硝子＞にぶつかった。

透明な防御魔法が一面炎で塗り上げられる。サイクル・グラス＜大円硝子＞に突き刺さったままだった矢が一気に燃えた。遠くから見えているヒトがいれば、馬車の後ろに円形の炎を背負っているように見えただろう。

「ヒイイイ！」

「余裕はありませんが、これぐらいなら耐えられます！」
隊長の悲鳴を無視して、それ以上の声量でガリガリが叫んだ。

精霊魔法としては一般的なランクである＜火炎の球＞は、見た目に派手でも、攻撃力はそれほどでもない筈だ。それが一発でも余裕がない、となると。

「……っ」

俺は生唾を飲み込んだ。これは厳しいかもしれない。

勢いが激しい分、炎が消えるのも早かった。

今度は魔銃を構えた男たちも前に出て来るのを確認。

「魔銃！　＜貫く枯れ葉＞三発！」
ハザー・デルフ

降り注ぐ矢と共に、黒い光が三本＜大円硝子＞に当たる。
サークル・グラス

「ぐうう！」

ガリガリの呻り声。声の感じからするとこの辺りがギリギリ限界か。

「グアッ！」

俺の肩に乗ったドラゴンの子供が尻尾で俺を叩いた。これまでにない行動に、俺は慌てて集団に意識を集中する。

一瞬、先頭を走る魔法使いが光ったのかと思った。

まるで炎が集まるように、空に伸ばした両手の先へ集まっていく。やがて馬の全長よりも長い炎の槍が出来上がった。

ゾクッと全身に鳥肌が立つ。

「で、デカイの来ます！　＜紅蓮の炎槍＞ッ！！」

魔法使いが投げつけた炎の槍は、いきなりスピードを上げ、一直線に＜大円硝子＞に飛び込んで来た。＜火炎の球＞の倍以上の炎が吹き上がる。

俺はあまりの眩しさに一瞬目をつぶってしまった。

パキィィン、と皿を落としたような音がして、慌てて目を開く。透明な防御魔法は粉々に碎け、炎と共に消えていく。

「ヒイイヤアアアアア〜!!」

隊長の曰く言いがたい悲鳴。気持ちは良くわかるが凄くウザい。

矢が馬車の後部や当たり始める。まだ数は多くないものの、やがて馬や御者台まで届くことになるだろう。

「牽制お願いします!!」

「はい!」

ガリガリの怒号に答え、魔銃を構える。狙いは正面の魔法使い。出鱈目に連射する。元々このサイズの魔銃では遠距離射撃には向かないので牽制目的だ。

だが、俺には珍しい幸運が訪れ、六発の^{ハサー・デルフ}貫く枯れ葉>のうち一発が、一頭の馬に当たった。かなりの速度で走っている集団では良くあることで、倒れた馬がもう一頭を巻き込み、転げ回る。欲を言えば魔法使いか、それだけでなくても魔銃を持った奴だと良かったが…
…どうも違うらしい。

ルースが空で戦っている今、反撃されるとは思っていなかったのか、脱落者が出たことで慎重になったのか、敵集団は少しスピードを落とした。

「お待ちせしました! 行けます、^{サークル・グラス}大円硝子>!!」

やけに頼もしく聞こえるガリガリの声と同時に、透明な円盤が復活する。

「はあ〜——」

俺は穴から出した胸から上を、馬車の屋根に投げ出した。安堵のため息が出てくる。

「——あ」

ため息を終える前に、気付いてしまった。

魔法使いを倒さない限り、^{サークル・グラス}大円硝子>は一撃で破壊されてしま

う、という事実。

トギルフ・タサフ
ルースはく空駆ける矢>を描き、落下の勢いと併せて速度を上げる。

敵もこちらを伺いながら、孤を描くように一定の距離を保つ。『盾』は手印を忙しく組み碎けたく菱形鉄壁ダイヤ・アイロン>をもう一度発動、『槍持ち』は鞍の上で体勢を整え、再度の攻防に備えていた。

時間が惜しい。ルースは敵の上空を取ろうと体を上に向けた。
二匹のサンダーバードも高度を稼ごうとするが、加速したく空駆トギルフ・タサフける矢>には敵わない。

魔力を限界まで込めて、今度は『槍持ち』ダイヤ・アイロンに向かう。

しかし、あと一瞬というところで菱形鉄壁>に阻まれた。

「……っ！」

攻撃は失敗に終わったが位置的に『槍持ち』が来ることはない。どう攻めたものかと、ルースはすでに次の攻撃に気持ち移っていた。至近距離で敵と鏖迫り合っている時には致命的な油断である。

『盾持ち』は不敵に笑うと、右手をこちらに向けたまま、左手で曲がった筒状のモノを抜いた。

カインドが持っているモノより一回り大きな――魔銃だった。

「なッ!？」

「驚くようなことか!? 基本だろうがよ!」

驚愕で一瞬動きが止まったルースに向かって、敵は突き放すように笑い、引き金を引いた。

奇しくも、撃ち出されたのはく打ちウォールド・テールフ抜く煉瓦>だった。ルースの

放ったものより魔力は弱いのか、黒い雷の幅は短いが、この状況では避けられない。

「くうっ！」

ルースは呻り、弾かれた大剣を強引に体の前に引き寄せた。流れに逆らった力任せの動作に筋肉が悲鳴を上げた。それでも何とか、射線上に構えることに成功する。

直後に着弾。

板に水をぶちまけたような音がして、ウォールド・テルプ＜打ち抜く煉瓦＞は起動を変えた。体を掠るようにして明後日の方向へ飛んで行く。

「おお……っ！」

しかし、衝撃を殺すまでは出来ず、ルースは吹き飛ばされた。

「何イいつ！？」

会心の射撃を無効化された『盾』が叫んだ。

「魔剣か？ 聖剣か！？ 冗談じゃッねえぞ！」

驚愕と怒りを混ぜたような表情でウォールド・テルプ＜打ち抜く煉瓦＞を連射してくる。

五発撃たれた魔弾を、ルースは弾き、流し、全て捌ききった。先ほどより距離があるのだ、不意を突かれることがなければこのぐらいいは対処出来る。
ということとは。

迅速に倒す為には——こちらが向こうの不意を突かなければならないのか。

ルースは覚悟を決めた。

「——サ、サークル・グラス＜大円硝子＞……ッ——！」

ガリガリの悲鳴じみた叫びが響いた。

これで彼が発動させた<大円硝子>は四回目になる。

敵はこちらの狙いと対策に気付いた様で、馬車への攻撃というよりは<大円硝子>を砕くことに専念している。敵魔法使いは、嫌になるほどの勤勉さで、休むことなく<紅蓮の炎槍>を放って来るのだ。

こうなるとガリガリと敵魔法使いとの総魔力量勝負という形になる。

そして、ガリガリはあまり総魔力量は多くないらしい。

当然弓矢や魔銃での攻撃も続いているので、こちらの分はさらに悪い。大部分が<大円硝子>で防がれているというのに、馬車の後部にはすでに数十本の矢が突き刺さっている。それほどの射撃から馬車を守っているのだ、使われる魔力も相当なものだろう。

俺は、魔銃を持った右腕で馬車の屋根に寄り掛かり、震える左手で剣帯に下げられたポーチから魔弾を取り出した。そろそろ魔弾も尽きそうだ。

防御魔法がない間の牽制もこれで三回。こちらからの射撃で倒せたのは初回の幸運による二人だけで、未だ集団の人数は十人以上いる。

絶望の嗚咽を漏らしそうになるのを堪えて後ろを見ると、敵との距離は100m近くにまで迫っていた。もう十分顔の判別が出来る距離だ。

俺は枯れ始めた喉に鞭打って叫んだ。

「――<貫く枯れ葉>三発！」

ここまで近付いてわかったのだが、向こうの魔銃は長距離用の大きなもので、タイミングを合わせかなり正確に撃ってくる。救いがあるとするれば、どうも連射は出来ないらしい、ということぐらいだ。

<貫く枯れ葉>が<大円硝子>に当たり、弾けた。

「そろそろ魔力が尽きます……！ ルースさんはまだですか……っ

！

ガリガリの悲痛な叫びに、こちらもあり変わらない声色で怒鳴り返す。

「まだです！ あと何回く大円硝子サークル・グラスを使えますッ！？」

「一回と半分！！」

そんなことを確認している間にも、魔法使いが次のく紅蓮の炎槍をを用意している。

「来ました、く紅蓮の炎槍です！」

「コレ砕かれたら、次ので最後ですよオオ！？」

一度立て直したと思われたガリガリの精神が、また恐慌の色を帯び始めた。

それでも敵は待つてくれない。

炎が空気を切り裂く不思議な音を伴って、く紅蓮の炎槍サイがく大円硝子クル・グラスを完膚なきまでに砕く。

ガリガリが次のく大円硝子サークル・グラスを用意するまで、牽制しなければ。これまでと同じように魔銃を構えた俺は、敵の動きが変わったことに気が付いた。

「二手に分かれる……！？」

敵は五、六頭ずつの集団に分かれ、それぞれ道の端の方へ移動し始めた。

かなり距離が迫ったことで何かしようというのか、業を煮やして強硬手段に出る為か、こちらの魔力が尽きかけているのを察したか。何にせよ、どちらも近付けるわけにはいかない。

今日何発目になるか分からないく貫く枯れ葉ハサー・テループを、今度は当てずっぽうではなく、狙って撃った。標的は向かって右側を走る集団の先頭。

一発、二発は外れ。

しかし、距離が縮まったからか、三発目が馬に当たった。またしても倒れた馬が他の馬を巻き込み、三匹が転げ回って道に取り残される。

「——っしゃ！」

俺は思わず拳を握り締めて喜んでしまった。

次の瞬間——。

「グアーッ——！」

どこか焦ったようなドラゴンの鳴き声が聞こえたと思ったら、左肩に衝撃。矢ではない。敵の魔銃による<貫く枯れ葉>だ。撃ったのはどっち側の誰だ。貫通したというよりは挟まれたと言った方が近く、その分出血が多い。そこまで確認したところで痛みを感じた。屋根に顔を押し付けるようにして呻いてしまう。

「——ッ——！　ぐうううう……！」

「グア！　グアー——！」

何とか悲鳴を上げるのを我慢するが、ドラゴンの子供が騒いだ。憲兵達がまたパニックになるかもしれない。静かにしてくれ。

「サ……ッ、<大円硝子>ッ……！」
サークル・グラス

息も絶え絶えの声でガリガリが言った。これが最後というのは、大げさではないのだろう。

痛みに耐えながら、視線を上げ、敵を確認すると、左側の集団が強く光っていた。

……何で後がない今になって間隔が短いんだよっ！？

炎の槍を掲げた魔法使いが他の者を追い抜き、先頭になる。

<紅蓮の炎槍>が発射された。

「……っ」

俺は、ただただ息を呑み、迫ってくる炎を眺める。ガリガリに警告することも忘れてしまっていた。

絶望で痛みすら忘れてるんだ、しょうがないじゃないか。

8・逃げ戦、空戦（後書き）

9月22日初稿

書き溜め完全に尽きました。頑張ります。

9・グリフォンライダー

トギルフ・タサフ
ルースはもう一度く空駆ける矢>を発動させ、標的を馬車に移されない範囲内で、出来るだけ距離を取る。

向こうは羽ばたきの邪魔にならない程度に近付き、どちらも待ちの構えだった。

「すー……、はっ」

呼吸を一つしてから、ルースは敵よりやや上空へ向けて、突撃を開始した。

——速度とタイミングが重要だ。

敵と接触するまでは5秒ほど。黒い大剣を刺突剣のように体の正面に構え、空いた左手は体の後ろに。速度が限界に達したところでトギルフ・タサフ<空駆ける矢>を解呪。左手は体で隠したまま呪紋を描き、発動の瞬間、体を捻って左手を敵に向けた。

すでに『盾』は真正面にいる。

ダイヤ・アイロン

敵が掲げるく菱形鉄壁>に掌底を喰らわせるつもりで左手を叩き込み、ルースは叫んだ。

ウォールド・テルーフ

「く打ち抜く煉瓦>ウツ!!」

「ぐぬうッ!」

ウォールド・テルーフ

ダイヤ・アイロン

零距离で放たれたく打ち抜く煉瓦>はく菱形鉄壁>をあっさりと砕いた。

次いで、魔法を撃ち出した勢いを利用して体を逆に捻り、大剣を真横に薙ぐ。

「——悪いが、想定内だぜ!」

『盾』が笑いを含んだ声色で叫んだ。

ルースの斬撃はサンダーバードの嘴にしっかりと受け止められていた。

「やっちまええー!!」

『盾持ち』の合図に答えるように、いつの間にか移動したもう一匹のサンダーバードが、ほぼ真下から飛び出して来る。鞍から腰を上げた『槍持ち』がその長い槍をルースに突き込んだ。

穂先がふくらはぎを貫通する。

「くううっ!!」

ルースの口から押さえ切れない呻き声が漏れた。

真下から左足を突かれたことで、左半身を上に向けて地面と平行の姿勢だ。

——これなら……使える!

「死ねえええええ!!」

動きが止まったルースに向けて魔銃を構える『盾』が叫ぶ。

——撃たれる、前に!!

ルースは嘴に咥えられたままの大剣を握り直した。さらにこれまでに右手だけで握っていた柄へ、左手を添えた。貫かれたふくらはぎの筋肉を締め、右足を槍の柄に乗せる。

例え不安定の極みである槍の柄だろうと、例え片足を貫かれていようと、一瞬の足場にはなる。

ルースの覚悟とは、防御や回避を捨ててでも、攻撃の糸口を——迅速な勝利を掴むことだった。

呼吸を整え、姿勢を調節した。

「——無極流大剣術——」

足の指先から力が増幅され、腕の先で弾けるイメージと共に、ルースは叫んだ。

「羅振断ッ！！」

傍目には静止しているようにしか見えなかったルースの大剣は、その剣を咥えたままの嘴の付け根から頸部までを真つ二つに切り裂いた。下顎以外の頭部を失ったサンダーバードから血が噴き出し、その巨体がぐらりと傾く。

「……ッ！！」

「む、無極流だああ……？」

有り得ないと表情で語る『槍持ち』と、鸚鵡返しで声を上げる『盾』。二人の乗り手は呆けた様に動きを止めた。

しかし、ルースにここで終わらせるつもりはない。

「ハアッ！」

貫かれたままの左足を固定し、右足で、槍を踏み折る。激痛に顔を歪めるが、その時には紋章を描き終わっていた。距離は近く『盾』はもう動けない。

ルースはこれが最後だと思いながら、術名を口にした。

ウォールド・テルフ
「＜打ち抜く煉瓦＞……！」

槍を捨てることが出来なかった『槍持ち』は、踏み折られた槍に引つ張られた形になり、次の動作に移るのに一瞬まごついた。何が起きたのか理解出来ていないような真つ白な表情で、ルースをぼんやりと眺めたまま、額を＜打ち抜く煉瓦＞に貫かれた。

ウォールド・テルフ
黒い雷はそのままサンダーバードも貫通し、地面に向かって走っていく。

「笑えねえってんだよ！ 無極流とか阿呆か！」

ゆっくりと落ちていくサンダーバードに跨ったまま、『盾』が大声で言った。驚愕を通り越して、前後不覚の表情になっている。

トギルフ・タサフ
ルースは＜空駆ける矢＞を描き、やや下方の敵へ向かって行った。

「そんな骨董剣法、もう存在してるハズがねえ！」

ウォールド・テルフ
連発される＜打ち抜く煉瓦＞を最小限の動きで避け、弾き、『盾』

に迫る。

「こんなに強いなんて！ 聞いて——」

黒い大剣が、まだ喚いている『盾』の首筋を切り裂いた。

乗り手を乗せたまま、二匹のサンダーバードは傍目にはゆっくりと落ちていく。

「最期まで逃げることを考えなかった、その姿勢は……敵ながら天晴れだ」

黒魔法の飛行術では難しい空中停止をしたルースは、敵の行く末を見守り、呟いた。

折れた槍に貫かれたままの左足を一瞥する。無理をさせた為出血は酷かったが、今は気にしていられない。

——カインド達の元へ行かなければ。

ルースは馬車を探して、周辺を見回し、息を呑んだ。

「——！」

馬車を見つけたからではない。

こちらに向かってくる魔獣を、見つけたからだった。

迫り来る<紅蓮の炎槍>はやけにゆっくり見えた。

燃え盛る炎が先端の一点から渦を巻いていることや、サークル・グラス<大円硝子

>をわずかに貫通してから砕くことに初めて気付いたぐらいだ。

最後の<大円硝子>サークル・グラスはきっちり砕かれてしまった。

敵——というより先頭で走る魔法使いは、どうやらこちらの状況を推測していたらしい。今は表情すら読み取れるほど近付いている

彼の表情は、勝ち誇った笑顔のお手本みたいだ。

「グアーツ！ グアツグアア！」

「——っ！？ もう魔力切れです！！ カインドさん、状況は！？」
「どうなったのだ？ どうなったのだあっ！？」

背中のフードで騒ぐドラゴンの子供にも、ガリガリと隊長の声にも答えることが出来ない。残酷な現実を伝えたら憲兵たちがどんな行動に出るか分からないし、何より、痛みに耐えるので精一杯だった。

せめて——、せめてあの魔法使いだけでも抑えないと。

左肩をやられて左腕は動かない。相当な速度で走っている馬車の屋根に胸から上を預けているので、右腕は体を支えている。

ほとんど手首の角度だけでハサー・デルーフ貫く枯れ葉>を撃った。狙いは二つに分かれた集団のうち、向かって左側の先頭、獰猛に笑った魔法使い。

基本的に黒魔法に反動はない筈なのに、狙いをつけて引き金を引く、その動作が肩に響く。

おそらくこれまでの人生で最も魂を込めた射撃は、あつさり防がれた。どこからか現れた半透明の盾。白魔法の<菱形鉄壁ダイヤ・アイロン>だ。先頭の魔法使いは両手で手綱を握ったままで、手印を組んでいない。魔法使いはもう一人いたのか。

無駄だと思いつつ引き金を引くも、もう二発撃ったところで弾切れ。痛みを耐えて引き金を引いたのに弾が出ない、そのガツカリ感といったら……。

気合で結果が変わるなんて信じちゃいけないけど、あんまりにも自分の行動が悪あがきで、むしろ笑えてくる。

「グアアアツ——！」

いつの間にかドラゴンの子供がフードから出ていた。屋根の上で

前足後足を踏ん張り、呻り声を上げる。赤い鬣はもちろん、長い尻尾も逆立て、まるで俺を傷付けられて怒っているかのようだ。

「危ないぞ！ 下がってるッ！！」

「グア！」

本気で叱り付けても、動こうとしない。子供の頃、家で飼っていた犬はちゃんと怒れば、大体言うことを聞いたんだが……。

敵はさらに距離を詰めて来た。＜ダイヤ・アイロン菱形鉄壁＞は発動させたまま、

集団の頭上に掲げるように、斜めに被さっている。維持にはあまり魔力を使わない白魔法は、必要のない状況になったら、こういった形で、視界の邪魔にならないようにどかしておくのが常識だ。

先ほどまで笑っていた魔法使いの顔が、驚きを浮かべた。

「いたぞ！ コレだあ！」

叫んだ時には、喜びの表情に変わっている。その視線は、完全にドラゴンの子供に向いていた。

やっぱり狙いは、ドラゴンの子供なのか。

「狙いはお前だ！ 逃げるッ！！ 逃げるって！！」

ほとんど泣き叫ぶように言った。

敵が目的の物を手に入れたところで——あるいは俺がこの子を敵に差し出したところで——助かる見込みはほとんどない。憲兵をここまで追い詰めたら、憲兵共々目撃者は消しておかないと危険だからだ。

どう転んでも助からないのなら、この子だけでも、逃げてくれた方がいい。そもそもヒトの都合に縛られるような存在じゃないんだから。

しかし、ドラゴンの子供は頑として微動だにしなかった。

突然、その小さな体からバチバチと音が鳴る。

当てにならないというか、思い通りにならないというか、とにかく

く俺はドラゴンの子供を戦力に数えていなかった。

「グウウウウウルアアアアアアアアアアアッ!!」

ピシャアアンという轟音と、それと同じぐらいの鳴き声。両手が自由にならない俺は、耳を襲った衝撃に、一瞬肩の痛みを忘れた。

ドラゴンから走った雷は、先頭の魔法使いを襲った。目も眩む様な閃光が視界を埋め尽くす。

「……クソッ!」

光が治まって見えた光景は、もう一度正面に掲げられたくダイヤ・アイ菱形鉄壁リだった。砕くまではいかなかったらしい。

これが通用するなら、まだ光明が見えたかもしれない。相手にダメージがなくても、防御魔法を一撃で砕くような攻撃は、向こうの勢いを削ぐからだ。ところが現実やはり残酷で、敵の勢いは衰えるどころか、さらに増している。

「この威力!! 間違いないっ!」

もはやすぐそこまで追い迫った魔法使いが言った。

「……グウウウ——!!」

ドラゴンの子供は諦めていないらしい。また全身を強張らせ、力を溜めるような動きを見せる。

「もういいから!! お前がこれ以上付き合う必要はないんだよッ!」

飼い犬がどうしても言うことを聞かない時は……ああ、そうだ、厳しい声で名前を呼んだんだっけ。この手は使えない。

遂に敵が追い付いた。目の前3mといったところだ。弓矢を持っていた奴らが剣を抜き、魔銃が俺に向けられた。

「ドラゴンの攻撃だけは注意しろッ! 他は無視して構わない! まずは無力化、殺すより目的を優先させろよ!!」

「オオオオオオオオオオッ!」

魔法使いの号令で敵全員が雄叫びを上げた。

「——っ!!」

俺は馬車の中に避難することすら思い付かず、屋根に胸から上を投げ出したまま、絶望のあまり固く目を瞑った。

——ルース!

次の瞬間に起こったことは、良くも悪くも完全に予想外だった。騒ぐことも喚ぐこともせずに、馬車を走らせていたムキムキが叫んだのだ。

「うああ~~~~っ!?!」

俺は驚いて後ろ——馬車全体からすれば進行方向——を振り返った。

驚だ。二匹の驚。片方は淡い黄色で、もう片方は黒に近い暗褐色。地面スレスレをこちらに向かって飛んで来る。

馬車も走っていることを差し引いても、とんでもないスピードだ。あつという間に距離を縮め、そのサイズが巨大であることに気付く。そして、どちらの驚も猫科の下半身がついていた。

驚ではない、グリフォンだ。その背には、全身鎧を着込んだヒトが乗っている。

「——あ」

挟み撃ちか。何もこのタイミングで来なくてもいいだろうに。

黄色いグリフォンに乗った騎士が、長い突撃槍を構えた。輝く鎧姿から、何もかも一発で吹き飛ばしてやろうという気概が滲み出ている。

激突——向こうからすれば突撃——の瞬間を、俺はぼんやりと待った。

しかし。

グリフォンは二匹とも馬車の脇を通り過ぎ、馬車を囲もうとしていた集団にぶつかった。

「ッ!？」

慌てて目で追う。

黄色いグリフォンに乗った騎士の突撃槍が^{ダイヤ・アイロン}菱形鉄壁>に当たり、硬質な音が響いた。

「イヤアアアアアッ!！」

騎士は意外にも甲高い声で咆哮した。一瞬持ち堪えたかに見えた^{ダイヤ・アイロン}菱形鉄壁>が砕かれる。先頭にいた魔法使いが、胸の中心を貫かれたのが、見えた。

あとはもう、一方的だ。

「ちょ!？ どうっ、どうっ!！」

ムキムキの焦った声が聞こえると思ったら、突如馬車が揺れた。車輪が滑り、車体が傾く。

屋根の穴から身を乗り出し、片手で姿勢を支えていた俺には、たまったものではない。意外と迫り来る敵よりこういう状況の方が怖い。さっきまでの諦めも忘れて、叫んでいた。

「おっ、おっ —— …… うわぁあっ!！」

一際強い揺れに、俺の体が浮いた。

「グアー!！」

ドラゴンの子供がこちらを振り返って鳴いた。

—— 投げ出される!

「ッ!！」

背中に衝撃。

でも思ったよりずっと優しい。というか柔らかい。

「無事か、カインド!！」

頼もしすぎる声に振り向けば――。

「――ルースッ！」

「――グアー！」

ルースは、傾いた車体から投げ出された俺を、左腕一本で抱え上げ、そのまま馬車の屋根に飛び込んだ。

傾いた車体を、まるで踏み付ける様にして、強引かつ迅速に平行に戻す。車輪が擦れる嫌な音がしたものの、何とか馬車は横転することなく停まった。

最終的には道を反転した形になったようだ。

「どう、どう！ いい加減言うこと聞きやがれッ――！」

落ち着きなく暴れまわる馬をムキムキが嗜める声が聞こえた。そういうえば、グリフォンは馬の天敵だ。その臭いにすら怯えると言われているのに、すぐそばを通り過ぎれば、パニックになるのも当たり前だろう。

「っはあ~~~~……」

俺は馬車の屋根に座り込み、大きく息をついた。ようやく緊張から解き放たれる。生きてるって素晴らしい。このまま気を失えたらどれだけ気持ちがいいだろうか。

「――ちよ、怪我してるじゃないかッ!? 手当てしないと――！」

「ぐあぐあ――！」

ルースとドラゴンが焦った声色で言った。ドラゴンが俺の膝の上に乗って来る。

視線を動かすのも億劫だったが、俺は顔を上げた。目の前に血塗れの左足。膝近くまでのブーツの中程、ふくらはぎ部分を槍が貫通している。

「おっ、お前の方が重症じゃねえか――ッ!?」

「ぐあ――!?」

「ああ、闘気で締めているから大丈夫だ。出血は止まっているし、痛みも我慢出来る。動きに重大な支障はない」

思わず俺とドラゴンがツツコんでも、ルースは涼しい顔をして、特に痛がる様子すらない。叫ぶたびに痛みで顔を顰めている俺とは大違いだ。

ぎゃあぎゃあ騒いでいると、ガリガリが穴からやつれた顔を覗かせた。

「……ああ、ルースさん。お互い命があって何よりです。と、とにかく状況はどうになりましたか？」

どこか悟りを開いたような表情で、元から痩せていた顔には張りが無い。魔力の使い過ぎというだけではないだろう。

俺は、馬車が停まった所からは少し離れた、敵集団とグリフォンに乗った騎士達の戦いの場を眺める。戦闘らしい戦闘にはなかったのか、もうほぼ終わっていた。

「鎧兜を着込んだ騎士を乗せたグリフォンに助けられた……んですかね？」

「グリフォン！？ グリフォンライダーですかッ！？」

俺の呟きに過剰に反応するガリガリ。立ったまま空を見ているルースが答えた。

「ああ。ルークセントの正規軍、グリフォン部隊だそうだ」

——何でお前がソレを知ってるんだ？

俺が口を開きかけたところに、真上から羽ばたく音が聞こえてくる。

もう一頭のグリフォンがゆっくりと降りて来た。体色は茜色。当然鞍が取り付けられ、鎧に鉄靴が差し込まれているのが見えた。

グリフォンは大きな翼をゆっくりと羽ばたかせ、優雅に着地する。大きい。肩の高さで3mほど。この間見たオルトロスとあまり変

わらないが、その翼の存在感といったらとんでもなかった。嘴から鳥つばい尾までよりも、翼の方が遙かに長いのだ。

その大きな翼を畳み、グリフォンは屈んだ。その視線は、馬車を引いてきた二頭の馬から離れない。

馬の方は、動いたら食われるとでも思っているのか、震えているのに後ずさることすらしなかった。

「上空の敵を倒したところで、三頭のグリフォンが近付いて来るのが見えたんだ。これ以上脅威を増やす訳にもいけないから、突っ込んだ」

ルースが説明する間にも、騎士がグリフォンから飛び降りる。

「初撃をかわされたり攻撃されたり、まあ色々あったんだが……」

このヒトが言うには、彼らはルークセント正規軍で、敵じゃないらしいんだ。それなら協力してもらおうと一緒に来た、というわけだ」顎に手をやって思案顔を見せるルースに、俺は肩の痛みも忘れて怒鳴っていた。

「正式な軍人に問答無用で突っ込んでった、だあああッ!？」

「知らなかったんだ、しょうがないじゃないか」

ルースは気分を害したらしく、口を尖らせる。

グリフォンライダーは兜を脱ぎながら、笑いを含んだ声で言った。
「お互い身内には苦労しているようだな」

四十代と思しき、壮年の男性だった。白いものが混じった黒髪は品良く撫で付けられ、口髭もキツチリ整えられている。身長は俺やルースとそれほど変わらないだろう。がっしりした体つきは部隊長を任されるのに相応しい威圧感があった。

いつまでも馬車の上から見下ろしているわけにもいかない。

俺が屋根から降りようとする、ルースは俺とドラゴンを抱えて飛び降りた。脚を怪我しているのに、痛みに耐える素振りすら見せず、当たり前のことをしただけだ、という顔をしている。

助けられた俺の方が呻いているのが情けない。

「ス、ス、ス……、スロウルム將軍ッ！」

馬車から転げ出てきた隊長が、グリフォンライダーを見て叫んだ。隊長を支えていたらしいガリガリも、御者台から降りたムキムキも、慌てて敬礼をする。

面倒臭そうに返礼したグリフォンライダーはぶっきらぼうに言った。

「君達、憲兵団サートレイト隊の任務は承知している。まずは負傷者の手当てをしたいのだが、よろしいか？」

「はっ……！」

もう一度敬礼をした憲兵達は、直立不動で固まった。

「——サラ！　ダイン！　終わったか？」

グリフォンライダー——スロウルム將軍が叫ぶ。

いつの間にか、道から少し離れた草原に、二匹のグリフォンが降りていた。嘴や爪に血がついていなければ、非常に絵になる光景だ。

騎士の一人がグリフォンから降り、走り寄って来る。先程その突撃槍で魔法使いをく菱^{ダイヤ・アイロン}形鉄壁く共々貫いた騎士だ。

「はい！　敵は殲滅！　こちらの被害はありません！」

「負傷者二名。早急に手当てを」

「了解しました！」

兜を脱ぎつつ敬礼した騎士を見て、俺は驚いた。

硬そうな茶髪から三角形の耳が飛び出している。

そして、着込んだ鎧は、胸の部分にしっかりとした膨らみが見える。

グリフォンライダーの一人は、獣人で女性だった。

9 グリフォンライダー（後書き）

9月26日初稿

10・細い腰に空

グリフォンは力強い羽ばたきで空を進んでいた。

「おおおおおお~~~~う!?」

「ぐーあー!」

俺の口が、勝手に叫んだ。

「ええい、抱きつくなア!」

サラと呼ばれた女騎士のグリフォンに乗せられた俺は、鎧をつけながら細い彼女の腰にしがみついていた。

淡い黄色のグリフォンは名前をソリスというそうだ。

すでに上空50mは超えている。

確かな大地は遥か下。

視界の半分を空の青が占めている。

正面からの風は強く、少し揺れるだけで鞍から滑り落ちそうな気がする。全身から力を抜くことが出来ない。

「ちょ、コラ! どこ触ってんの——触ってるんだツ!」

上昇している時はまだいい。風の関係なのか、たまに短い時間下降することがあって、胃袋が口から出てきそうなその感覚が、怖くて仕方がなかった。

そして、どうやら怯える俺が面白いらしく、ソリスはわざと上へ下へ移動するのだ。

「ハハッ、落ちたら僕が拾いに行くよ。そう怖がらなくてもいい!」
隣の暗褐色のグリフォンからルースが呼び掛けてくる。こちらのグリフォンはノクティス。ソリスに比べるとずっと落ち着いている。騎手はダインと呼ばれた騎士だが、兜を脱いだところを見ていないので、種族や年齢はわからない。鎧を着けた体つきからすると男性

だろう。

ルースは自分で飛べるくせに、何だかはしゃいでいた。

思わず怒鳴り返してしまう。

「落ちそうだから怖いんじゃないやねえよ！ この状況がすでに怖いんだよッ！！」

「わかったから——いい加減——そこから手をどけなさいッ！！」
金属製の籠手をつけたサラの肘が、何度背中に落とされても、この腕をほどく訳にはいかない。

「サラ、相手はラチハークの子爵令息だぞー！」

前を飛ぶ茜色のグリフォンに乗った将軍が振り向いた。スロウルム将軍も、さっきまでの威厳はどこへやら、少年のような若さとテンションの高さを見せていた。

「女性に噛り付くような貴族はいませんッ！！」

「何と言われようと、この腕は放せないッ！！」

サラの台詞も、俺のプライドも、恐怖の前では何の影響も与えない。

将軍は面白がった口調のまま、言った。

「すまないが、グリフォン部隊は空の上では自由がモットーなんだ。少々の無礼は見逃してくれ！ 私の鞍が普通の物だったら、こっちに乗ってもらったんだがなー！」

将軍の鞍はどうやら特別製で、完全な一人乗り用だ。何とビックリ、変形機能があった。元々グリフォンに取り付けられたベルト類に、鎧の前垂れ部分を固定し、そこに乗るわけだ。グリフォンから降りた時には、鎧はどこかに収納され、腰回りの鎧として機能するらしかった。

「まあ、最初は怖くても、そのうち病み付きになる！ それは私が保証しようッ！」

何が楽しいのか、スロウルム将軍は笑った。

——絶対病み付きになんかならねえ！　ていうかもう二度と空なんか飛ばねえ！

俺はサラの腰にしがみ付きながら、こんなことになってしまった経緯を思い返した。

襲撃から助けられたその後。

道から外れた小さな丘の上。

ちよつとした木立に座り込んで、俺は治療を受けていた。

將軍は憲兵達と会話中。どうやら襲撃を受けてからの状況を説明しているらしい。

グリフォン三匹は、ダインの監視の下、少し離れた草原で、戦利品でもある馬肉を食べている。

「……」

気まずい。

俺の隣には獣人の女騎士、サラ。俺の肩に手を翳し、白魔法の治療術である<低位治療>^{ロー・キュア}を施してくれている。

彼女の年齢は俺より少し上、二十歳前ぐらい。やけに跳ね上がった髪型なんかに代表される獣人特有の野性味と、騎士らしい上品でキビキビとした仕草が、アンバランスでありながら魅力的だ。顔立ち一つとっても、かなりの美人さん。ついでに、鎧の膨らみを信じるなら胸も相当ある筈である。

そんな美人女騎士に治療魔法をかけてもらうなんて、かなりテンションが上がる展開だろう。將軍が彼女に俺の治療を命じた時には、心の中で歓声が上がった。

「……」

しかし、である。その気の強さが伺える顔は、何故かとても不機嫌だった。むしろ俺を睨んでいると言ってイイと思う。

何か不快にさせるようなことをしただろうか――？

黙ったまま治療を受けるのも気が引けるので、俺は無理矢理口を開いた。

「……あ、あの。獣人で魔法が使えるのって珍しいんですね？」

「私は先祖返りでこんな容姿だけで、純粹な獣人というわけではない。それに、獣人を肉体に頼った体力馬鹿だと思うのは、偏見だ」
サラは目も合わさずに言い放った。メイプラにはそれほど獣人はいないので、どこかで聞きかじったことを言ってみたわけだが。

うん、知ったかぶりは火傷するだけですね。

またも嫌な沈黙が降りる。

サラから視線を逸らすと、ルースが自分で自分を治療していた。

傍らにはドラゴンの子供がその様子を眺めている。

赤い短刀を抜いたルースは、ふくらはぎを貫通した槍の穂先側を、足ギリギリの所で切り落とす。そして、無造作に柄の部分を握り、それはもう何の躊躇もなく、一気に引き抜いた。ずりゅつという音。ルースは軽く顔を顰める程度で、呻り声すら上げなかった。

「いちいーっ」

「ぐむあーっ」

見ていただけの俺とドラゴンの方が変な声を上げてしまう。

「……この男の治療にはもう少しかかる。今抜いても出血が増えるだけだ」

ルースにちらりと視線を送ったサラは、冷たい口調で事務的に言った。若い女性なら大抵見とれる程の美形であるルースですら、この態度である。俺達全員にいい感情を抱いていないってことか。というか、この男って。

「問題ない。自分で治せる」

ルースは特に気分を害した様子もなく答え、右手の人差し指で紋

章を描いた。

ノイクドアベア・ウオルス

黒魔法の低位再生術<塞ぐ掛け金>だ。掌と同じぐらいの大きさの黒い輪が現れる。これを患部に翳す事で、傷口の再生が行われるわけだが……。

「ぐうううつ……！」

ルースの端正な顔が、歪んだ。

黒魔法による治療はとても痛いのだ。槍を引き抜いた時にも大して痛がる様子を見せなかったルースが、脂汗をかく程痛いのだ。その痛みは傷口の深さと治す速度に比例する。貫通するような傷を治す際の痛みなんて、俺には想像することも出来ない。

「お、おい。何も黒魔法で治さなくても。そんなに急ぐんなら、先に治癒術かけてもらえば良かったのに」

「い、急いでいるわけじゃないさ……。白魔法だと動きに支障が……ぐつ……出るからな」

白魔法の治癒術は痛みがない代わりに、治した部分が元の機能を取り戻すまで、時間とりハビリを必要とする。傷の深さや負傷した部位にも依るが、動かそうにも上手く動かせないし、強烈な違和感が残ってしまうのだ。

「さすがに王都に着けば、もう荒事はないだろ……。そこまでしなくても」

「く……万全を期すに……越したことはない。これぐらいは戦士として当然の嗜みだ。大体、隊長が『もう心配あるまい』と言った直後だったんだぞ、襲われたのは」

自分で黒魔法の再生術をかけるは、自分自身で傷口をグリグリやっているのほとんど同じだという。それを当然の嗜みと言い切るとは、頭が下がる思いだ。

「……それほど我々が信用できないのか……」

「はい？」

サラがぼつりと呟いた。俺は意味がわからなくて、思わず聞き返してしまう。

「ふん、何でもない。お前の治療は終わりだ」

そう吐き捨てるように言っ、サラは將軍のところへ行ってしまった。

「……」

足音高く去っていく女騎士をぼんやり見送っていると、治療を終えたらしいルースとドラゴンの子供が、俺の隣に腰を下ろした。

「怒っているようだったぞ。何かしたのか？」

「ぐあー？」

「いや、心当たりが一切ない」

本気で何が理由なのかわからないのだから仕方がない。

俺は気持ちを切り替え、左腕を確認することにする。

治療の為、鎧は脱いでいた。さらにベストとシャツを脱ぎ捨てる。ベストに被害はないが、シャツの方は左の肩から袖口までべつとりと血がつき、ついでに肩に穴が開いている。どうせ捨てるのでタオル代わりにすることに。

すでに固まった血を拭くと、傷跡一つない。感情や態度はともかく、サラはきちんと治療してくれたのだろう。

「キレイに治ったな。動かせるか？」

「肘から先の動きに支障はない……んだが、腕が上がらない」

腕を前に伸ばすのは、何とか出来る。しかし、横に広げる動きは難しい。

これは……何気なく動かこうとした時に動かせないことに気付く、なんてことがありそうだ。ちゃんと意識しておかなければ。

荷物から替えのシャツを引っ張り出し着込む、そんな動作にも動かしづらさが付き纏う。鎧をつけるのは、ルースに手伝ってもらった必要があった。

「お前の方は大丈夫なのか？ 痛みが残ってるとか、体力が切れかけてるとか。問題があるなら言っておいてくれ」

鎧をつけるのに悪戦苦闘しながら、ルースに尋ねる。

「ふむ。報告しておかなければならないようなことは、ない。強いて言えば、ブーツが血塗れになってしまったことぐらいだ」

「俺も使った分の魔弾補充しないとなあ」

未明に使った分も補充していなかった所に、さっきの襲撃で使いまくった為、残りはく貫く枯れ葉ハサー・テルプが四発。弾倉に空きがあるのは心細い。

「それぐらいはこちらで保障するさ」

俺とルースが座ったまま振り向くと、將軍が苦笑していた。傍らにはサラと、憲兵隊々長。

すぐに立ち上がり、俺は顔の前で両手を振った。

「いえいえっ！ 護衛してもらっている上に怪我也治してもらいました。これ以上恩情を賜るわけにはいきません」

「――遠慮はいらない。他国からの旅行者をこちらの都合に巻き込んでいるのだ。それぐらいはさせてくれ」

將軍はそう言って、俺の鎧についている家紋を見た。

メイプラ子爵の関係者だと気付いたのだろう。

「名乗るのが遅れたな。私の名はトマス・スロウルムという。ルークセント軍魔獣師団所属、グリフォンの方はソリソカルだ」

名前に応じるように茜色のグリフォンが舞い降りた。

スロウルム將軍の隣まで寄って来ると、落ち着いた様子で草原に伏せる。

「私はラチハーク国メイプラ子爵の次男、カインド・アスベル・ソールベルズと申します。こちらは私の従者を務めるルース・アーカードです」

俺は名乗り、ルースと共に一礼した。將軍達グリフォンライダーは軽く頷き、驚いた様子は見せなかったが、隊長は明らかに狼狽した。

「さて、あんなことの後で唐突ではあるが。君達には私と一緒に来てもらいたいのだ」

「……私達はサートレイト隊の方々と、王都の憲兵隊本部まで同行し、そこでサートレイトで起こったことの証言をすることになっていたと思うのですが……」

「それはもちろん承知している。我々が護衛任務を引き継ぐ形だ。王都に行くのは変わらないんだが……、憲兵隊本部ではなく、王宮まで同行してもらうことになる。実を言えば、君達の窮地に居合わせることになったのは、ただの偶然ではない。我々は君達を迎えに来たのだ」

スロウルムの言葉が終わる前に、俺は混乱していた。

王宮といえば、国の中枢である。そこに、ただの外国人の旅人である俺とルースを招くという。

証言や報告なんて憲兵隊の本部で十分だろう。

偶然ではなく、命令があつたとするなら余計におかしい。グリフォンライダー三騎、それも將軍と呼ばれるようなヒトを、身分も明かしていない俺達の迎えに寄越すなんて。

さらに正規軍に命令出来るとすれば、それは王か国が、いずれにしても相当な権力を持つモノだ。

「閣下。やはり混乱しておられるようですし……一度本部に寄っていただいてから再度お話する……というのはどうでしょうか？」

隊長がおずおずと將軍に語りかけた。いつの間にか、俺達にまで敬語を使っている。

「それでは、あちらにも必要のない面倒事が増える。お前達サートレイト隊の立場もわきまえているつもりだ。私の方からきちんと話

を通す、安心しろ」

將軍の断定的な物言いに、隊長は顔を伏せてしまった。ルークセント側では話がまとまったわけだな。

俺達には、横柄さはかけらもない真摯な態度で、將軍が尋ねてくる。

「どうだろう、ソーベルズ卿。一緒に来てくれるか？」

ルースをちらりと見れば、特にご意見はない様子。俺に任せることだね。

不自然な状況は正直怖い。將軍だつて全てを話しているわけではないだろう。何か大きな問題に巻き込まれている悪い予感がする。とはいえ。將軍の真摯な態度自体に嘘はないと思われた。性格的にも能力的にも憲兵隊々長よりは信用出来る。

——まあ、隊長より信用出来ないヤツはそうはいないだろうけど。

「わかりました。元々私たちは旅の身の上。それもそう急ぐものでもありません。將軍閣下のご意向に沿わせていただきます」

俺がそう言つて頭を下げると、將軍は軽く息を吐いて、肩の力を抜いたようだ。

「こちらの都合に合わせてもらつて、本当にすまないと思つている。荷物をまとめてくれ。君達の準備が出来次第、すぐにでも発つ」

俺は治療の為に必要となるかと思つて荷物を引つ張り出していたが、ルースの小さな荷物が馬車の中にあつた。

グリフォンに怯えて、離れている馬車に二人で向かう。

「要求は同じようなものなのに、隊長に比べれば不快感はなかったな」

あつさり言うルースに、俺はげんなりしながら答えた。

「でも事態は大きくなつてゐる気がするぞ。王都ならまだしも王宮なんて。ラチハークでも見たことしかないのになあ」

「やっぱりおかしいことなのか？」

「おかしいことだらけだけど、全部説明してるヒマがない。お前は
どうする？ 俺だけ付き合えばいいなら、お前達だけでも——」

「ここまで来たら付き合うさ」

「ぐあーっ」

ルースは苦笑しつつも最後まで言わせず、ドラゴンの子供は尻尾
で俺の側頭部を叩いた。

確かに、ここまで来て、関係ないからどこへでも行けばいい、と
いうのも冷たい話かもしれない。

弱くて身分的な縛りがある俺だって、今ここでサヨナラなんて話
になったらイイ気分はしないだろう。

馬車に着くと、ムキムキとガリガリが寄って来た。

「ここでお別れか。王都に着いたら、さっきの戦いを肴に酒でも、
と思ってたが」

「まあ、王都で会うこともあるかもしれませんが」

右手を差し出してくる二人と、順番に握手をする。

不思議なことに、俺は別れるのが少し寂しかった。出会って丸二
日、話し始めたのは今朝からだと言うのに、一緒に酒を飲むのも悪
くないと思える。

ルースとも握手を終えた二人に尋ねた。

「そちらも王都に？」

「ええ。本部への報告任務は継続中です。それと、これは独り言な
んですが——」

ガリガリはそこで声のトーンを落とした。

「——今、ルークセントの上の方は、ゴタゴタしているようです。
スロウルム將軍は人格者ですが、それ故に、多数派とは言えません。
気を付けてください」

その内容は、俺の嫌な予感を膨らませるものだった。しかし、俺が知っておいた方がいい情報なのだろう。これまでの印象で言えば、堅実で冒険をしないガリガリが、わざわざ耳打ちをしてまで伝えるべきだと思うほどの。

そして、こんなやり方で懸念を伝えてくれるぐらい、俺達を心配してくれているのだ。

「お世話になりました。お三人の旅の安全を祈ります」
「ぐあー」

俺は、心からの感謝を込めて、キチンと頭を下げた。ドラゴンも俺の肩からわざわざ顔を出したようだ。ルースは右の拳で胸の中央を叩いた。

「じゃあな」
「それでは」

憲兵二人は背筋を伸ばした敬礼で答えてくれた。

荷物を持って戻る途中、やはり直立不動で隊長が立っている。いきなり腰を直角に曲げて頭を下げてきた。

「……数々のご無礼、大変失礼致しましたッ」
「いやいやいや。今更ですし、ちゃんと名乗ってないこっちが悪いんですよ」

そっちも名乗ってないけどな！

俺は内心の罵倒を隠して、笑顔で答える。

隊長も完全に作った笑顔で、ビシッと敬礼すると、初めて聞くハキハキとした声で言った。

「憲兵団サートレイト隊々長、ノリプトン・ティンクです！ ぜひ、ご実家の方にも、よろしくお願い致します！」

……今さっき上がったばかりの憲兵への高感度が一気に下がった。「わかりました。サートレイト隊々長ノリプトン・ティンク様は、外国人の私にも素晴らしい対応をしてくれたと、詳細をお話させて

いただきますね」

さすがにイラッとしたので、皮肉を込めた台詞を残し、將軍の所へ急ぐ。隊長は凍った笑顔ですっと敬礼したままだった。

草原では將軍を含むグリフォンライダーが三人が打ち合わせをしているらしく、すぐ傍でグリフォンが三頭、羽を畳んで思い思いの姿勢をとっている。

「おお、来たか」

將軍のすぐそばに、茜色のグリフォンが鳥類の前足と猫科の後足で立っていた。確か、名前はソリソカルと言ったか。

グリフォンは俺達に視線を向けたかと思うと、突然前足を折った。真っ直ぐに伸ばしていた首も地面に向け、草原に嘴が付きそうだ。それは、どう見てもお辞儀だった。

残り二頭のグリフォンもそれに倣うように、こちらに向かって頭を下げる。

「——ッ!？」

俺も驚いたが、グリフォンライダー三人の反応はもつと極端だった。サラなんかは一步後ろに下がったほどだ。

軍人三人がそのまま動かないので、恐る恐る口を開く。

「あ、あの……何か問題が……?」

「いや、グリフォンは、良く言えば誇り高い——悪く言えば傲慢な生き物なのだ。グリフォンライダーがどんなに命じても、気に入らない者に乗せないこともある。それが……」

將軍が戦慄すら匂わせる表情で言う間に、ドラゴンの子供がフードから出てきた。俺の肩に前足を乗せ、頭を下げたグリフォンを見下ろす形になる。

「ぐあー」

ドラゴンの、どこか威厳すら漂わせた鳴き声に、グリフォン達は頭を上げた。

その光景は、まるで主人と家来を思わせる。平伏した家来に馬上から労いの言葉をかけるような。

つまり、グリフォン達がお辞儀をしたのは、俺ではなくドラゴンに対して、ということだろう。

「――あ」

サラが呟き、グリフォンライダー達が視線を交わらせた。互いに目配せをし合い、何かを確認したように見える。

アイコンタクトは一瞬だった。将軍が口を開く。

「それが君が拾ったというドラゴンの子供か」

「は、はい。そうです」

少しの間黙っていた将軍は、俺の視線に気付くと、咳払いを一つした。

「……んんっ。城に着いたら、その辺りの事を詳しく聞きたいものだ。では、騎乗！」

強引だが有無を言わせない号令で、俺達はグリフォンに乗り込むことになった。

俺は完全に侮っていたのだ。

魔法も使えないし、ラチハークではほとんど魔獣に乗る機会はない。俺は、空を飛ぶのがこんなに怖いとは、想像もしていなかった。地面が遠ざかっていくにつれて、視界に入る範囲が広がり、確かな存在を感じられるモノがどんどん減っていく、その恐怖。

ソリスがいきなり宙返りを披露した。

地面が上。足元には空。当然回想なんて吹っ飛んだ。

「うひいゝゝゝッ!？」

「ぐーあー!」

「うるさいっ! もういつそ落ちろッ!」

サラはもう諦めたのか、俺がしがみ付くのを黙認してくれるようになった。力を込め過ぎた腕が震えているからかもしれない。むしろ台詞はどんどん厳しくなっていたけど。

落ちろとか鬼か。

「カインド! 今度、君を抱えて飛んでみたいんだ! きつと楽しいぞ!」

ルースが笑いを堪えた様子で言った。

どっしりとしたグリフォンに跨っていても怖いのに、抱えられただけで空を飛ぶなんて、絶対に楽しい筈がない。

言い返そうにも、恐怖で、気の利いた返答が出来なかった。悔しかったので、とりあえず叫ぶ。

「うるせー!!」

「アンタの方がうるさいっ!!」

サラの口調が微妙に変わってきた。彼女もどこか気が緩んできたのかもしれない。少なくとも、むっつり不機嫌さを表すだけでなく、直接文句を言ってくるのは、前進じゃないかと思うのだ。

「おっ、見えてきた! 苦行ももう終わりだぞ、ハッハッハ!」
將軍の声に恐る恐る顔を上げる。

緑ばかりの大地の向こう、地平線に別の色があった。

「あれが……」

俺にとっては、とても長く感じた空の旅だったが、実質は数十分といったところだろう。確かに馬車で行くよりずっと早い。

ひと時恐怖を忘れてぼんやりしている間にも、その様々な色は、
どんどん大きくなっていく。

それまではしゃいでいたスロウルム將軍が、どこか畏敬の念すら
感じさせる声色で呟いた。

「そう、あれがルークセントの王都、クルミア。そしてその中央に
位置するのが、目的地——クルミア宮殿だ」

10・細い腰に空（後書き）

10月1日初稿

11・国の宝

上空から見ると、王都クルミアは中心から五つの方向に街が広がっていた。

それぞれ大きな街道が走っており、北の道はそのままユミル学院にも繋がっている筈だ。

東側だけが東北と東南に分かれている。東南の道がこれまで馬車で移動して来た道で、俺の祖国ラチハークまで続く。

「……っ」

俺は圧倒されていた。こんな光景は、空でも飛ばないと見られない。

ふわり、と急に少し高度が下がった。

「ひいっ――！」

途端に恐怖がぶり返し、出来るだけ視界をサラの背中だけにする。「この光景を見せてもまだ駄目か――！　こうなったら、夜の王都を上空から見せる必要があるな――！」

「断固拒否しますッ！」

俺が將軍の軽口に叫び返している間にも、ぐんぐん高度は下がっていき、地面が近くなっていく。

目を瞑るのも怖いので、状況が確認出来る程度に、下界を覗いた。

都のほぼ中央に城があった。

かなり広大な敷地を堀で囲み、その内に壁が張り巡らされ、いくつかの塔が立っている。

どうもグリフォンはそこを目指している様だ。

「――ちょ、直接王宮に降りるんですかああッ！？」

俺は思わず叫んでいた。王都とは言っても、都の外にある駐屯所

なんかに降りると思っていたのだ。

「黙ってなさい！ 我々は特別！」

サラが肘鉄と共に答え、続けるように將軍が言った。

「魔獣師団の中でも、グリフォン部隊は王都守護の役割を担っているんだー！ 平時は色々決まりがあるんだがなー！ さあ——、降りるぞー！」

ソリソカルが前に出た。茜色のグリフォンを頂点とした三角形の形になる。

がくん、と一気に高度が下がり、二つの塔が近付いてくる。

「うああああああああッ！？」

グリフォン達はわざわざ塔の間を通過し、城壁の内側に突入した。綺麗に刈り込まれた芝生が、眼前に迫る勢いで視界を占領する。

俺は思わず、腕により力を込めてサラの腰に噛り付き、激突の衝撃に備えていた。

「~~~~ッ！！」

地面にぶつかると一瞬前、グリフォンは大きく翼をはためかせた。

上からと後ろから、押し付けられる様な不思議な感覚。

そして、あつけないほど優しく、ソリスは地面に降り立った。

「~~~~~~~~ッは~~~~~~~~」

すぐそこに芝生を確認した時には、俺の体が勝手に大きく息を吐いていた。どのぐらい前から呼吸を忘れていたのかもわからない。

地面のありがたさを噛み締めていると、サラがやけに静かな声で告げて来た。

「~~~~~~~~ もう一度だけ、言います。そこから、手を、離しなさい」

「——あれ？」

気が付けば、俺の右手が彼女の胸に位置している。当然鎧の上かななので金属の感触しかないが、それだけに今の今まで気付かな

かった。

そうつと右手から力を抜き、彼女の体から離れる。
いきなり頬に衝撃。

俺は、サラの裏拳で、グリフォンから文字通り叩き落された。

「わ、わ、悪かったとは思うけど、何も殴らなくてもいいじゃん！」
「当然の報いよッ！ ヒトの胸鷲掴んでおいて、よくも文句が言えたものね！？」

地面に座り込んで抗議をする俺を、グリフォンの背に座ったままのサラが見下ろす。頭の上から飛び出した三角の耳がピンと立っていた。

「今のは、カインドが悪い」

「ぐーあー」

すでにグリフォンから降りていたルースと、いつの間にかフードから出ていたドラゴンの子供がため息交じりに声を上げた。多分殴られる前に、自主的に地面に降り立ったのだろう。

ルースが腕を伸ばすと、ノクティスはわざわざ頭を下げ、撫でやすい体勢になった。嘴を撫でられ、くるくると心地良さそうに鳴いている。

俺もあっちの方に乗りたかったなあ。

「災難だったな。だが……裏拳一発だったら儲けモノだったと思うぞ」

隣に立った將軍が、言った。後半はギリギリ俺に聞こえるぐらいの音量だった。笑いを堪えた表情をしている。

俺は慌てて足に力を込めようとしたが、萎えてしまって立ち上がれない。

「無理に立とうとすると怪我をする、そのまま少し休むんだ」

「……すみません」

「謝る必要はないさ。グリフォンに限らず、魔獣に初めて乗った者は、大抵そうなる。君の従者みたいなのは、むしろ珍しいくらいだ

な」

俺が休んでいる間に、グリフォン達は帰還した。ダインの乗ったノクティスを先頭にして、入ってきたコースを戻る形で城壁の外へ飛び去って行く。

王都の東が、グリフォン部隊の基地だそうだ。

俺の足に感覚が戻ってきたのは、十分近く経ってからだった。ドラゴンの子供をフードに入れ、立ち上がる。

「では行こうか」

將軍の案内で、王宮正面に向かう。

グリフォン達が降り立ったのは、王宮全体からすると北側の裏庭、その外れだった。

城壁に沿った連絡通路を移動し、南側の開放的な庭園に出る。

「ほう、これは……」

ルースが呟くくらい、庭園は素晴らしかった。広い空間を贅沢に使用し、様々な種類の植物が確認出来る。所々に見える木々はどっしりと根を下ろし、年季どころか風格すら感じさせた。枝から差し込む光はどこか柔らかく、庭園全体に落ち着きすら与えている様だった。

刈り込まれた常緑樹で作られた仕切りの間を通る。

草花も豊富だ。一種類を一箇所に植えるのではなく、わりと大雑把に配置されているのに、どこか調和が取れていた。今は特に、春に咲く花々が咲き乱れ、景色だけでなくその香りまで楽しませられる。

小道を抜け、ほぼ真南にある王宮正面に出た。

巨大な宮殿が司会に飛び込んで来る。

門から宮殿まで続く、広大な広場には、忙しく歩くヒトたち。

城壁に比べると、内側は文化的とも言おうか、かなり装飾重視だ。いくつかの塔が見えるが、その目的は戦や警備ではなく、権威付けだろう。宮殿自体も豪華で威圧的な印象を受ける。

当然だが空から見るとよりも大きく感じられ、俺は圧倒された。將軍に小声で尋ねる。

「——正面から入ってもいいものですかね？」

さすがにヒトが多い。馬車で隊長が言った通り、背の高いエルフや背の低いホビットもちろほら見えた。

どうも視線が痛い。

俺はおのぼりさん丸出しだし、ルースは装備がみすばらしい割りに美しく、しかも落ち着き払っているの、かなり目立っていた。

「悪事を働いたわけでもなし、コソコソする必要もなからう」

俺一人が居心地の悪さを感じているらしい。

ズンズン進む將軍についてやけに広い階段を上り、宮殿内に入る。エントランスは広く、天井が高い。埋まるほどふかふかの絨毯や綺麗な石造りの階段、俺には誰だかわからないデカイ肖像画等の贅沢品が目を引き。

感心していると、慌しい足音が聞こえてきた。

「……——ッ!？」

兵士達だ、と思った時には、囲まれていた。

その数、三十人ほど。將軍を先頭にした俺達四人を円形で包囲するには十分過ぎる。

全員ピカピカの鎧に身を包み、身なりが整えられ、槍やハルバードを装備している。

正規軍、王宮勤務の衛兵達である。

彼らが構える武器が狙うのは——、俺とルースだ。

エントランスにざわめきが起きる。文官や下働きの女性達が、遠巻きからこの捕り物の行く末を追っていた。

これは……畏か。逃げ出さないよう懷に招き入れ、捕らえる。

朝からの騒動に、空の旅でいっぱいだった俺は可能性すら考えていなかった。助けられ、何だかんだと交流出来たグリフォンライダー達を疑わなかったのだ。

「どういうことだ、これは？」

ルースが静かな口調で言った。すでに右手は大剣の柄を握っている。

俺は慌てて將軍を見た。

今までのくだけた態度も、全て俺達を油断させる為のウソだったのだろうか？

「——私も聞きたいな。どういうことなんだ、コレは？」

將軍はゆつくりと口を開いた。目の前の衛兵を見据え、その瞳には確かな怒りを含んでいた。少なくとも俺には、彼が演技しているようには思えなかった。

おそらくは隊長格であろう衛兵が、將軍に怯みながらも武器は下ろさず、答える。

「命令を受けました……！ その二人を捕らえろとっ！」

全員の視線が俺とルースに集まる。

サラは混乱しているのか、三角形の耳がぺたんと垂れていた。

「その命令は誰から受けた？」

「それは——」

「俺だよ、スロウルム將軍」

廊下側の死角から、品の良い服に身を包んだ男が現れた。カールした長い金髪に四角い顔。腰には豪華な拵えの細剣。耳が僅かに尖っているものの、体つきは中肉中背で、顔立ちも合わせると、エルフツぱくない。

「ではお主に聞こうか、コーヴィン將軍。……どういうことなんだ、

「コレは？」

コーヴィンはゆったりと歩きながら、こちらを見下しきった表情で、その問いに答えた。

「我がルークセントの国宝を盗んだ犯罪者を捕らえるのは、当然のことだろう。そっちこそ、どういふつもりだ、スロウルム。犯罪者を堂々と宮殿に招き入れるとは」

「我々も命じられた任務を遂行しているに過ぎない」

スロウルム將軍は冷めた視線で、すぐ傍まで歩いて来たコーヴィンを見据えた。

互いに敵意を剥き出しにして、二人の將軍が視線を交わした。とは言え、俺はそれどころではない。

国宝を盗んだ犯罪者？

当然心当たりなんて――。

「その任務を命じたのは？」

「――王女殿下だ」

混乱する俺に追い討ちをかけるように、さらなる単語。

しかし、コーヴィンはスロウルム將軍の台詞を鼻で笑った。

「フン、信用ならん」

例えでまかせだとしても、王女という言葉に対してこの態度は、国と王族に忠誠を誓う軍人としていかなものだろう。

「王女殿下には、公式の場にて話を伺うでしょう。……その二人を捕らえた後でな！」

コーヴィンの宣言に反応するように、衛兵達が一步にじり寄った。兵士の本分は命令を守ること。彼らは盲目的にコーヴィンに従う。そこに交渉の余地や手心はない。

「貴様ッ!!」

スロウルムがそれまで抑えていた怒りを露にし、サラが俺達の前に出た。彼女の手も腰の剣を掴んでいた。

ルースまで腰を低くし、背中の大剣を抜こうとする。俺は慌てて止めた。

「ちょ、ちょっと待て！ 何かの間違いだとしても、衛兵を傷付けたら——」

「無抵抗で捕まれって言うのかっ！？ こっちに非はないぞ——！」
「でも」

俺がルースの説得を続けようと一歩動いたその時、首筋に槍が突き付けられた。

「——！」

「抵抗す——」

「グアアアアッ！」

衛兵の言葉を遮る怒りを含んだ鳴き声。

それまでフードの中で大人しくしていたドラゴンの子供だった。

俺の肩に前足を乗せ、突き付けられた槍をその小さな口で噛み折る。

「————！」

衛兵達に緊張が走った。ほぼ全員が一步下がったほどだ。

「それが……！」

一歩も動かなかったコーヴィンの目の色が、変わった。まるで極上の女を目の前にしたような、飢えた視線。

その目を見て、俺は確信した。コーヴィンの目的は俺やルースじゃない、ドラゴンだ。

「グウウウウウ——」

呻るというより、呼吸を整えるような鳴き方には、聞き覚えがあった。

どこからともなく小さな炎が現れ、ドラゴンの口の周りをゆっくりと旋回し始める。

これは、宿や道での襲撃の時に見せた精霊魔法らしき攻撃だ。

俺は肩に乗るドラゴンに向かって怒鳴った。

「お前も待ててッ！！ 怪我させたら結局罪になる！」

「ウウウウー」

炎は一度大きく燃え上がり、次に小さくなった。輝きが増している。勢いが弱まった訳ではなく、凝縮されたと見るのが妥当だ。

「魔獣は問答無用で殺されることだってあるんだぞ！！ やめろってば！！」

「ウルアアア——！」

どんなに怒鳴っても、ドラゴンは攻撃を止めようとはしない。呻り声は咆哮と言ってもいいほどの勢いに達している。

「アアアアア——！！」

「やめろッ、イクシス——！」

俺は思わず叫んでいた。

イクシスというのは、小さな頃、実家で飼っていた犬の名前だ。どうしても言うことを聞かない犬を、当時名前を含めて叱っていた。さっきの襲撃の際にチラっと思いついていたからか、体が覚えていたのか、無意識のうちに口を付いて出てしまったのだ。

「ッ——」

ドラゴンの子供は身を竦め、それに反応する様に炎は霧散した。エントランスに沈黙が下りる。

「っは~~~~~……」

誰も身じろぎすらしない中、俺は盛大にため息をついた。ドラゴンを見ると、首を縮めて、上目遣いで俺を見た。

「ぐう」

情けない鳴き声。バツが悪そうな表情に見えないこともない。

ともかく最悪の事態は避けられたかと顔を上げると。

「……？」

周りにいた全員がドラゴンではなく、俺を見ていた。

「命令を聞いたぞ……」

「完全に支配下に置いている……」

「あれがあ……」

衛兵だけでなく、遠巻きに騒動を観察していたらしい城勤めの文官達までざわめきだした。

「——な、名前を呼んで、応えた——」

コーヴィンが信じられないものを見たという表情で呟いた。さっきまでの見下した表情は鳴りをひそめ、汗が噴き出している。

「……っ」

將軍とサラまでもが、俺を見て言葉を失っていた。

「いつの間に名前なんて付けたんだ、カインド？」

ルースは衛兵に囲まれていることも忘れた様子で、首を傾げた。いやいやいや、それどころじゃないでしょう。

誰か説明してくれないかなあ等と思った頃、良く通る声がエントランスに響いた。

「そこまでです。衛兵達は武器を下ろしてください」

正面にある階段の踊り場に、金髪の少女がいた。華奢で小柄な体にドレスを着込み、豪華なマントを羽織っている。

傍らには背の高い茶髪の男が控えている。やや薄い頭髪からすると、五十は超えているだろう。こちらも豪華なマントを身に着けていた。將軍達のような武の匂いは一切しないし、どうやら剣一つ帯びていないようだ。

衛兵達は槍やハルバードを納め、背筋を伸ばした姿勢で俺達の包囲を解いた。さらに壁際に下がると、直立不動になる。

少女はゆっくりと階段を下りて来た。背の高い男も彼女に続く。

「スロウルム將軍に命令したのは私です。内容は——彼らを保護し、ここへ連れて来ること」

静かなエントランスに、少女の台詞だけが響く。

「しかし、彼らは——」

「控えなさい、コーヴィン將軍」

少女に詰め寄ろうとしたコーヴィンを、彼女の後ろに控えた男が一言で止めた。

タイミングと声色、抑揚が完璧だった。

痩せた老人一步手前の割りに、声にも力がある。外見の印象では、周りを威圧する雰囲気等ない筈なのに、やけに怖い。

コーヴィンは、続く言葉を忘れたかの様に口を動かした後、黙った。

「——殿下」

將軍とサラが片膝を付き、頭を垂れた。

「任務完了ですね」

少女は頷きながらそう言うのと、俺とルース、そしてドラゴンの子供に視線を移した。

綺麗よりは可愛らしいの方が賞賛としては似合う容姿だ。俺より年下、と言っても一つか二つほど、十四、五歳だろう。良く見れば、頭の上には小ぶりの王冠が載っている。

「ご挨拶が遅れました。私の名はリイフ・エイダ・サイ・ルークセント——」

真っ直ぐに俺を見ながら、少女は愛らしい口を開く。

「——ルークセント王国第一にして唯一の王女です」

一瞬呆けていた俺は、我に返るとすぐに言った。

「私はラチハーク国メイプラ子爵が次男、カインド・アスベル・ソールベルズと申します。これなるは私の従者、ルース・アーカードで

「ございます」

ルースと共に、出来る限り上品に頭を下げる。

王女は膝を折って返礼し、俺の肩に乗るドラゴンを見据えた。

「ルークセント王女の名を持って、貴方方を歓迎します。我らが国宝『龍の卵』を保護し、届けてくれた客人として」

王女の宣言は、普通の声量ながら、エントランス全体に響き渡った。

けれど、言葉が聞こえても、それを理解出来るかどうかはまた別の話だ。

11・国の宝（後書き）

10月6日初稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5472w/>

ドラゲーンズ・メール

2011年10月7日03時17分発行